

地理・地質から見た鎌倉の中世石窟遺構“やぐら”の分布について

逗子開成高等学校2年 小久保 たいが



朱だるきやぐらの玄室天井に残る朱色塗装

1、はじめに

鎌倉には“やぐら”というものが3,000～4,000基あるといわれている。“やぐら”とは、鎌倉～室町時代に鎌倉で主流となった横穴式の墓である。僕は小学生のころから鎌倉の遺構に興味を持ち、やぐらを含め鎌倉の遺構を見てまわっていた。その中で、やぐらは大量にあることが分かったが、そのやぐらも寺社や谷戸などの存在によるある程度の規則が存在している、つまりやぐらの分布に偏りがあるということが文献調査によってわかった（大三輪龍彦『鎌倉のやぐら』1977年4月26日）。そのことを部活で研究対象としていた地学系の知識で確かめられるのではないかと思ったため、地理・地質の視点を中心とした次項のような調査を行った。

2、調査内容および方法

調査で調べることは次の通りである。

- ①やぐらの大きさ、入口面積 (cm²)
 - ②やぐらの位置
 - ③やぐらが彫られた岩盤 (岩石)
 - ④やぐらの状態 (副葬品、風化)
- ※①はやぐらが風化を強く受けている場合は、風化後の大きさ (測定可能な大きさ) を出す。



(図1) 寿福寺裏にあるやぐら群

①②④は実地調査^{※補足1}によって数値を出した。③は②のデータをもとに地質図（産総研発行）を使用して同定した。

3、考察① 大きさ、入口面積の比較について

下に各やぐらの大きさ、入口面積の平均値を地域ごとに分類した表を載せる。

整理記号	エリア	鎌倉時代のころは	奥行	幅(cm)	高さ
Ta	玉縄	玉縄北条氏の本拠地(戦国時代)	215	225	180
Fk	深沢	鎌倉と藤沢を結ぶ交通の要所	105	165	145
Te	天園H.C	風葬の地	266	310	199
Nk	二階堂	幕府官僚の別荘	950	625	600
Og	扇ガ谷	武士の館があった交通の要所	288	352	164
Kk	片瀬腰越	海沿いの交通路	データ不足	363	277
Gk	極楽寺	風葬地、大寺社地、病院	260	270	150
Sa	佐助長谷	寺社密集地	111.0	144	104.2
Yo	雪の下大町	幕府及び鎌倉府の中心地	265	269.5	155
Jo	浄明寺	中規模寺社や官僚別荘があったところ	464.2	415.5	217.9
Kt	北鎌倉	北は大寺院、南は地獄谷	192.9	212.9	162.7
No	名越大町	大規模墓地や風葬地がある	311.7	304.7	214.1
Zu	逗子	鎌倉からは少し離れたところ	90.9	123.4	102.7

(図2) エリアごとのやぐらのサイズおよび入口面積の平均値
(巻末資料1) に全文掲載

右に上のエリアと対応した範囲の地図を載せる(図3)。




(図2)のようにエリアごとにやぐらの入口面積にばらつきがあることがわかった。また、やぐらごとに大きさを分けた地図を次に載せる(図4)。




(図3) 調査エリア



(図4) 大きさに調査したやぐらの位置をまとめたもの googleマイマップ使用
分類記号の基準:やぐらの入口面積をkとすると

$k < 30,000$ (cm²) →  $30,000 \leq k < 50,000$ →  $50,000 \leq k$ →  (? はデータ不足)

(図4)を見ると、 (入口面積50,000cm²以上)が存在する場所はやぐらが密集していることがわかる。以上のことからやぐら密集地では大きいやぐらが存在する確率が高いことが推定できる。

4、考察② やぐらが彫られた岩石に対する考察

地理院地図にやぐら及びやぐら群の位置を記録し、地質図上で比較した(図5)。



(図5) やぐら群(二重丸)及びやぐら(丸)の位置を地理院地図に記録した図
産総研地質図『横浜』『横須賀』使用(凡例は巻末資料参照)

鎌倉・室町期はすでに完新世なので地質分布は現在と同じだと仮定し、調査したやぐらの場所を地理院地図に反映した結果、ほとんどのやぐらが三浦層群の特徴である火山砕石岩などの堆積岩（地質図中のZu、No、Fk、Ktの範囲）に彫られていることが分かった。それらの堆積岩は、この地域の中では沖積層に比べれば浸食に強いものの総合的には風化に弱い岩石である。約700年経った現在、やぐらの風化はだいぶ進んでおり、石切り場と判別困難なものも現れた。当時は現在と違い、掘削を手作業で行っており、付近に火成岩層などの固い岩もまれだったので、のみで削れて石材としても利用できる凝灰岩層が重宝されていたことも考えられる（考察④で詳しく説明する。）。



(図6) 風化によって玄室の半分以上が失われたやぐら

5、考察③ 副葬品についての考察

一部のやぐらには五輪塔をはじめとした副葬品が現存している。副葬品も完全な状態で残っているものは少ないが、やぐらの年代測定など、やぐらの特徴を特定するのに使用した。

・石塔に使用している岩石についての考察

石塔はやぐらの周辺にある岩石から作っていたと仮説を立てたが、主要な石塔の大半は安山岩製であることが分かった（富岡畦草、三山進『石のかまくら』1966年3月10日（第二版）東京中日新聞出版局）。これらの五輪塔は鎌倉の外から石材を調達した物（本小松石など）である。しかし、それ以外の五輪塔は仮説通り、火山砕石岩などの凝灰岩が多く、やぐら周辺の岩石から作っていたと考えられる。そこで、大きさではなく石質の中に祀られている人の身分の違いがあるのではないかと考えた。

・副葬品の種類による考察

副葬品は大抵は五輪塔及びその残骸と思われるものである。大規模なものには地藏菩薩像や固定されている無縫塔などの仏教寺院を模したとも見られるような副葬品も見つかっている。比較的大きいやぐらには、彫り込みの五輪塔も発見された。特に西瓜が谷やぐらでは立体的な彫り込み五輪塔があり、高貴な人が埋葬されていたと思われる。

・副葬品その他の保存状況についての考察

五輪塔などの副葬品は、街道などに近く長い間露出していたものでは形が失われ、梵字が刻まれていたと推定されるものも解説不能の状態になっている。逆に近年発見されたもの（北条首やぐらは江戸時代の山火事で発見された）や、先祖から代々墓地として管理されてきたもの（伝相馬師常墓など）の中には完全な状態で残っているものもある。考えられる理由としては、発見時まで埋没していた、もしくは手入れされていたことにより雨風による風化（図6）を免れた、若しくは定期的に五輪塔などの副葬品を新調していたことの2点が考えられる。



（図7）安山岩（本小松石）を使用した忍性塔

6、考察④ 当時のやぐらと人との関わりについての考察

当時（鎌倉、室町期）の人と石の関わり方を、やぐらという側面を考える。考察②で説明したように、やぐらの大部分は堆積岩層、詳しくは凝灰質砂岩に彫られている。この凝灰質砂岩は昔から“鎌倉石”と呼ばれており、加工しやすく、

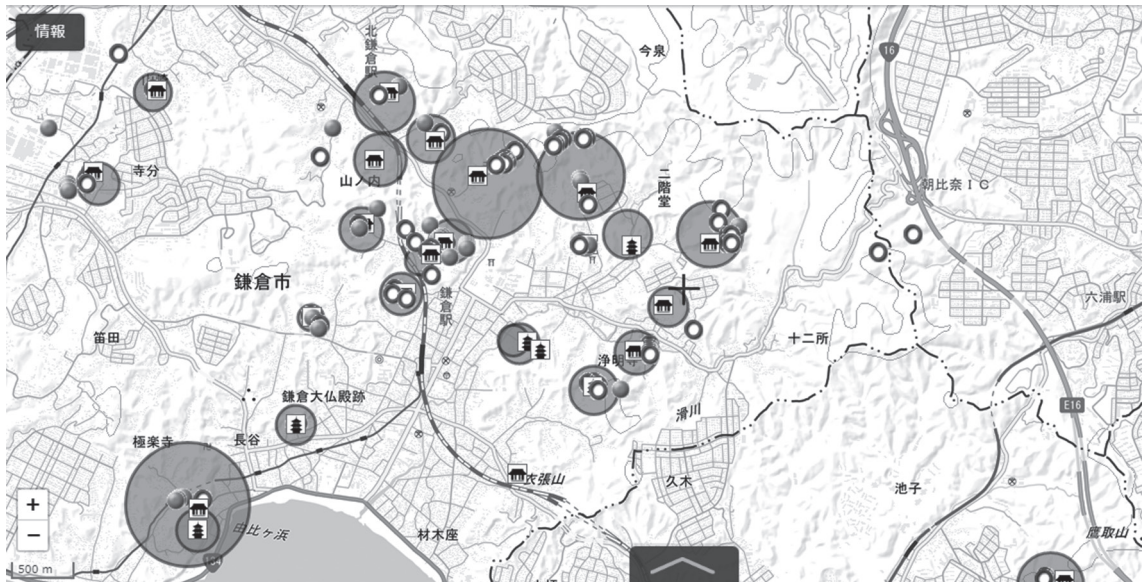
“石材のダイヤモンド”と称され重宝されていた。そのため、鎌倉にはいくつもの石切り場がある。

・やぐらが先か石材が先か

上記のことから2つの仮説を立てた。(1)鎌倉石は破壊がしやすい。つまり彫りやすいという点から、やぐらが鎌倉石の層に作られたという説、(2)鎌倉石の石切り出しのついでにやぐらを造成したという説である。(1)は考察②から考えることができる。(2)に関しては、やぐら密集地の近くに石切り場が多かったことから考えられる。

・やぐら造成場所のロケーション（周辺施設など）について

やぐらが作られた場所に今まで挙げたこと以外に規則性がないか調べてみた。まず、(図8)を見て欲しい。やぐら及びやぐら群の位置についてまとめたもの（位置は図5と同一）だが、それに一部の寺院の位置を追加した。多くのやぐらが寺院または廃寺の周辺に集中していることがわかる。



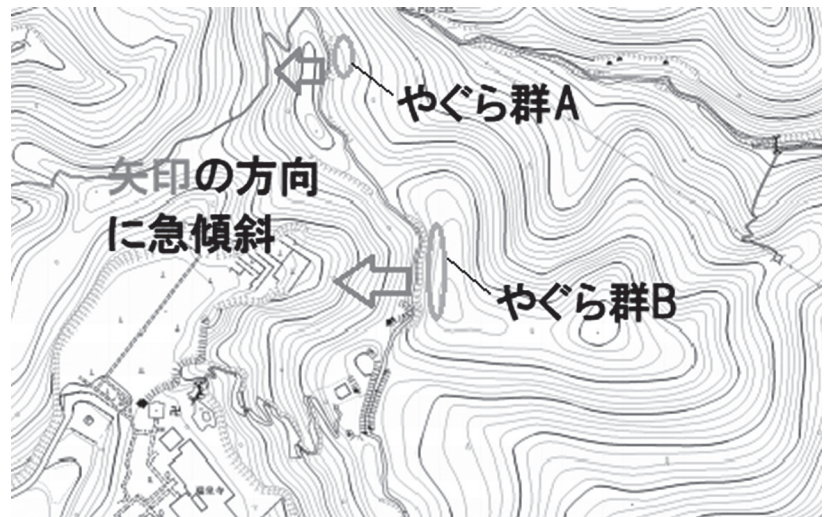
(図8) やぐら及びやぐら群の位置と周辺の寺院（廃寺を含む）の大まかな境界域^{※補足2}を描画した図

実際、やぐらの所在地については、『鎌倉攬勝考』にも寺院の裏山と書かれることが多い（『鎌倉のやぐら』にもやぐらを寺社に付属するものとして分析した記述あり）。このことから、やぐらは寺院と墓地という立場で強い結びつきを持っていたことが想像できる。

・やぐらの前に広がる景色について

一部のやぐらは急斜面上に造成されており、遠くを見渡すことができる。下の図（図9）は瑞泉寺東の裏山にあるやぐら群の位置を鎌倉市の都市計画図上に示したものである。

(図9) 瑞泉寺裏山のやぐらと
周辺の地形図
鎌倉市都市計画図使用→



また、このやぐら群は昔は整備されていたため、航空写真（図10）から判断する限り、富士山を見ることができたのではないかと考えられる。実際、瑞泉寺からは鎌倉時代当時は富士山を望むことができる寺として有名だったという（瑞泉寺パンフレットより）。



(図10) 航空写真およびやぐら群と富士山の位置関係
 写真中の破線は (図9) のやぐら群Bから富士山に向かって伸ばした線

・造成当時の道とやぐらとの関係について

当時の鎌倉街道のルートとやぐら及びやぐら群の分布について見てみると (図11)、多くのやぐら群は鎌倉街道 (図11上の黒の線) 付近にあることがわかる。



(図11) やぐら分布図と造成当時の鎌倉街道の位置対応図

7、考察まとめ

ここに今まで挙げてきた考察を簡潔にまとめようと思う。

・造成場所と直接関連がある考察

視 点	考 察
大きさ（入口面積）	大きいやぐらはやぐら群を形成することが多い
造成された岩石	火山砕石岩などの凝灰岩上にあることが多い
ロケーション	寺院の近く、景色の良い所にもやぐら群が
	鎌倉街道沿いに集中する傾向がある

・造成場所と直接の関連はない考察

視 点	考 察
副葬品の石材	有名物は安山岩（外部調達） それ以外の多くは凝灰岩
副葬品の種類	仏教寺院を模していたと考えられる
副葬品の保存状況	一部のやぐらは雨風に晒されない環境か人の手が常に加わっていた可能性大
優先目的	石切り場にされたのち、やぐらになった可能性も

8、未発見のやぐらの位置を予測する（考察の検証）

上記の考察が正しいか未調査の寺院を使って検証をすることにした。ロケーションと岩石種類の観点から、下の地図の寺院（図11、白色点位置）を調査地点とすることにした。

調査内容は2、と同じである。僕の予想が正しいければ白色の点の地点の寺院にやぐらがあることになる。



(図11) 正覚寺の位置
(地図は地理院地図に産総研地質図と赤色立体地図を合成したもの)

・調査結果

浄土宗正覚寺の境内墓地が海に面する凝灰岩崖上にあることが分かったので調査に行った。そこでサイズが非常に大きい（そのため測定不可）開山のやぐらが発見された（図12）。そのため、上記の考察は正しいと推定することができる。ちなみに、相模湾を望める寺であると案内には書いてあったが、やぐらからだとも草木に阻まれてあまり遠くを見渡すことはできなかった（図13）。冬になったら視界がよくなる可能性もあるので、冬に追調査を予定している。



(図12) 正覚寺開山のやぐら



(図13) 正覚寺のやぐらから見た景色

9、まとめ

今回の研究及びその調査で、やぐらは山中に不規則に作られたものは少なく、寺、廃寺域の周辺に集中したり、やぐら群を形成するパターンが多かったり、三浦層群を構成している凝灰質の堆積岩上に造成されたりと、ある程度の規則を持っていることがわかった。また、一見同じような穴に見えても、内部装飾や五輪塔などの装飾や岩質を調べることで埋葬されていた人の身分を推定できる可能性を見つけた。また、多くのやぐらが凝灰質の堆積岩上に造成されたことが、地質図によって比較的わかりやすく表せることがわかった。今後は、さらに数多くのやぐらを計測するとともに、奥行き規則性についても調べていきたい。また、三浦層群相当層（鎌倉と同じような地層）をもつ千葉の南房総あたりにもやぐらのような遺構があると聞いたので、そこについても、同じような規則性がないか調べていく。

10、補足事項

※補足1 調査場所について

調査場所は無作為に選択した。また、資料で補った箇所は極力調査場所を選択しなかったエリアにするようにしてある。

※補足2 寺域マップについて

寺域は全体がちょうど入るくらいの円で囲ってあるため、一部寺域でない部分も円に含まれているところがある。

添付資料

資料1 やぐらの大きさ、副葬品、造成場所などをまとめた表

- ・同じやぐら群で数が多いものはグループごとに網かけにしてある。

その他補足

- ・大きさ不明の部分は不明若しくは空欄にしてある。(入口面積に影響を及ぼす場合は入口面積の数字を伏せてある。)
- ・資料作成にあたって参考にした文献
 - ・財団法人かながわ考古学財団『かながわ考古学財団調査報告207 宅間谷東やぐら群 平成15・16・17年度 鎌倉市内急傾斜地(浄明寺宅間C地区)崩壊対策工事に伴う発掘調査』2007年3月21日
 - ・鎌倉市教育委員会『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』2009年7月10日
 - ・東国歴史考古学研究所『東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集 中世石窟遺構の調査Ⅱ—鎌倉・六浦所在の『やぐら』群—』1998年3月
 - ・財団法人かながわ考古学財団『かながわ考古学財団調査報告162 大倉幕府やぐら群』2004年2月27日
 - ・神奈川県、横浜市、鎌倉市、逗子市世界遺産登録推進委員会『龍門石窟研究院との共同調査に係る学術会議報告書』2019年3月15日

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かればここに記入
Ta-1	玉縄	武将のやぐら (玉泉寺境内)	180	200	180	36000	五輪塔…不完全なもの 風～水×2、風～火×1、 火～地×1、不明×1、 無縫塔×1、卒塔婆×3	長方形	壁が段になっている	泥岩 (上総層群大船層)	柵がありあまり近づけない		江戸時代
Ta-2	玉縄	当山歴代住職のやぐら (玉泉寺境内)	250	250	180	45000	無縫塔×3、地藏菩薩×1、卒塔婆×3	長方形	壁が段になっている	泥岩 (上総層群大船層)	柵がありあまり近づけない		江戸時代
Ta-3	玉縄	龍寶寺やぐら								泥岩 (上総層群大船層)			
	玉縄	平均	215	225	180	40500							
Fk-1	深沢	山崎やぐら (アーバンヒルズ鎌倉前)	不明	200	180	36000	不明	長方形	壁に四角形のくぼみ	凝灰質泥質砂岩及び凝灰質砂岩 (上総層群野島層)	柵があり近づけない		
Fk-2	深沢	山崎やぐら X1	不明	200	150	30000	不明	長方形	不明	凝灰質泥質砂岩及び凝灰質砂岩 (上総層群野島層)	私有地内により近づけない		
Fk-3	深沢	山崎やぐら X2	不明	150	150	22500	不明	正方形	不明	凝灰質泥質砂岩及び凝灰質砂岩 (上総層群野島層)	私有地内により近づけない		
Fk-4	深沢	寺分 (泣き塔) やぐら	200	300	200	60000	五輪塔…完全なもの×1 ～、宝篋印塔×1、卒塔婆×4	長方形	大きい岩の中にあるような感じ	凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	柵があり近づけない	宝篋印塔…鎌倉石	南北朝時代
Fk-5	深沢	梶原御霊神社のやぐら X1	100	100	90	9000	祠×2、不明×1	正方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			南北朝時代
Fk-6	深沢	梶原御霊神社のやぐら X2	50	100	90	9000	五輪塔…不完全なもの 火～地×1	正方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	風化が進んでいる		南北朝時代
Fk-7	深沢	梶原御霊神社のやぐら X3	70	100	90	9000	なし	正方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			南北朝時代
Fk-8	深沢	深沢小学校脇のやぐら	不明	100	100	10000	不明	正方形	柵の向こうは丸結構奥が深い	凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	柵あり、奥が深い		
Fk-9	深沢	深沢やぐら X1	不明	100	200	20000	不明	長方形	不明	凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	私有地内により近づけない		
Fk-10	深沢	深沢やぐら X2	不明	300	200	60000	不明	長方形	不明	凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	私有地内により近づけない		
	深沢	平均	105	165	145	23925							
Te-1	天國 H.C	法王窟	300	250	300	75000	地藏菩薩? ×3	長方形	壁が段になっている	凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	石像の首がもがれていた		
Te-2	天國 H.C	百八やぐら y2 地点1 (左から)	300	300	200	60000	地藏菩薩×2、不明×3	長方形	壁に穴が開いている	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	風化が進んでいる、石像の首がもがれていた		鎌倉時代
Te-3	天國 H.C		300	400	200	80000	五輪塔…不完全なもの 空 ～風×1、地藏菩薩×2	長方形	壁に穴が開いている	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	風化が進んでいる、石像の首がもがれていた		鎌倉時代
Te-4	天國 H.C		300	400	200	80000	地藏菩薩×1	長方形	壁に穴が開いている	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	風化が進んでいる、石像の首がもがれていた		鎌倉時代
Te-5	天國 H.C		300	300	170	51000	地藏菩薩×1	長方形	壁が段になっている	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	石像の首がもがれていた		鎌倉時代
Te-6	天國 H.C		300	300	250	75000	地藏菩薩×1、不明×1	長方形	壁に穴が開いている	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	風化が進んでいる、石像の首がもがれていた		鎌倉時代

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かれればここに記入
Te-7	天園 H.C		370	300	200	60000	地藏菩薩×1	長方形	壁に穴が開いている	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	風化が進んでいる		鎌倉時代
Te-8	天園 H.C	百八やぐら y1 地点1 (左から)	300	280	200	56000	五輪塔…完全なもの×4 (掘り込み)、地藏菩薩×1	長方形	壁に四角形のくぼみ、棚、納骨穴、扉跡あり	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	完全な状態で残っている		鎌倉時代
Te-9	天園 H.C		200	280	200	56000	地藏菩薩×1	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	少し埋もれている		鎌倉時代
Te-10	天園 H.C	百八やぐら y1 地点2 (左から)	250	300	200	60000	五輪塔…完全なもの×3 (掘り込み)	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	少し埋もれている、崩落しそう		鎌倉時代
Te-11	天園 H.C		250	300	200	60000	不明×1	長方形	壁に四角形のくぼみ	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	少し埋もれている		鎌倉時代
Te-12	天園 H.C		250	300	200	60000	なし	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	少し埋もれている		鎌倉時代
Te-13	天園 H.C		250	300	200	60000	なし	長方形	扉跡あり	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	少し埋もれている		鎌倉時代
Te-14	天園 H.C	大↑	250	300	200	60000	なし	長方形	壁に四角形のくぼみ	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			鎌倉時代
Te-15	天園 H.C		250	300	150	45000	五輪塔…完全なもの×1 (掘り込み)	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	少し埋もれている		鎌倉時代
Te-16	天園 H.C	大↓	150	330	170	56100	なし	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	少し埋もれている		鎌倉時代
Te-17	天園 H.C		250	350	150	52500	不明×6	長方形	壁が段になっている	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	少し埋もれている		鎌倉時代
Te-18	天園 H.C	地点2×9以降	250	300	200	60000	不明	長方形	不明	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	足場がなく危険なため調査不可		鎌倉時代
Te-19	天園 H.C	百八やぐら y2 地点2 (ひとまとめ)	250	300	200	60000	不明	長方形	不明	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	足場がなく危険なため調査不可		鎌倉時代
Te-20	天園 H.C	お塔の首やぐら	未	240	160	38400		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-21	天園 H.C	お塔の首やぐら (?)	不明	不明	不明	0		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-22	天園 H.C	朱だるきやぐら y3 地点 (左から)		350	140	49000	残骸らしきもの	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-23	天園 H.C	大		480	160	76800		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	横に何か彫ってある、垂木で装飾済み		
Te-24	天園 H.C	小		210	140	29400		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-25	天園 H.C					0		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-26	天園 H.C					0	残骸らしきもの	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-27	天園 H.C			200	160	32000		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-28	天園 H.C	小↓		180	140	25200		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-29	天園 H.C	朱だるきやぐら y2 地点		70	150	10500		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かれればここに記入
Te-30	天園 H.C			130	170	22100	残骸らしきもの	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-31	天園 H.C			190	130	24700	残骸らしきもの	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-32	天園 H.C			140	100	14000		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-33	天園 H.C	小↑		150	130	19500		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-34	天園 H.C			320	170	54400		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-35	天園 H.C	小↓		150	100	15000		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-36	天園 H.C			160	95	15200		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-37	天園 H.C	小↑	40	160	60	9600		長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)			
Te-38	天園 H.C	瑞泉寺裏山やぐら群1			90	90		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	片側崩壊		
Te-39	天園 H.C					0		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	片側崩壊		
Te-40	天園 H.C		180	120		120		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	完全な形		
Te-41	天園 H.C					0		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-42	天園 H.C	北条首やぐら群 (右から)				0				泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-43	天園 H.C					0				泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-44	天園 H.C	小↓		150	110	16500		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-45	天園 H.C			170	110	18700		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-46	天園 H.C	小↑		140	110	15400		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-47	天園 H.C			170		170				泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-48	天園 H.C			160		160				泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-49	天園 H.C					0				泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-50	天園 H.C			100		100				泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-51	天園 H.C			220		220				泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-52	天園 H.C	瑞泉寺奥やぐら群		150	130	19500	五輪塔×1	正方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-53	天園 H.C	奥津義やぐら		150	130	19500	五輪塔×1	正方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Te-54	天園 H.C	瑞泉寺裏山やぐら群2		140	120	16800		正方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
	天園 H.C	平均 (4/18 現在)	251.9	237.6	160.9	38211.7							

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かればここに記入
Nk-1	二階堂	十三仏やぐら (覚園寺境内)	950	1000	900	900000	十三仏像×13、ろうそく (拝観のたびに追加)	長方形	十三仏像のところはくぼんでいる。	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	地震により一部崩れている。		鎌倉時代
Nk-2	二階堂	覚園寺やぐら	不明	250	300	75000	不明	長方形	不明	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	崩落及びルート外のため調査不可		鎌倉時代
Nk-3	二階堂	天王寺跡やぐら	670	450	273	122850	かわらけ×79	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	崩落済み		
	二階堂	平均	950	625	600	375000							
Og-1	扇ガ谷	海蔵寺やぐらX1	500	400	200	80000	五輪塔…完全なもの×9 (豪華なもの×1)、墓石×6、宝篋印塔×3	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)	かなり大きい		鎌倉時代
Og-2	扇ガ谷	海蔵寺やぐらX2	550	400	200	80000	仏像×2 (鳥居の先のは宇賀福弁財天)、鳥居×1	長方形	入り口から入ってすぐに広がる	泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			鎌倉時代
Og-3	扇ガ谷	海蔵寺やぐらX3	160	320	160	51200	無縫塔×1、仏像×1、不明×1	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			鎌倉時代
Og-4	扇ガ谷	海蔵寺やぐらX4	130	320	130	41600	無縫塔×1	半円状	上向きの半円状	泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			鎌倉時代
Og-5	扇ガ谷	海蔵寺やぐらX2Y2	100	320	130	41600	なし	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)	風化されて数十年後にはなくなりそう		鎌倉時代
Og-6	扇ガ谷	浄光明寺やぐら (受付付近) Z1				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-7	扇ガ谷	浄光明寺やぐら (受付付近) Z2				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-8	扇ガ谷	阿弥陀堂裏やぐらX1 (浄光明寺境内)				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-9	扇ガ谷	阿弥陀堂裏やぐらX2 (浄光明寺境内)				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-10	扇ガ谷	弁財天やぐら (浄光明寺境内)				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-11	扇ガ谷	階段横やぐら (浄光明寺境内) X1				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-12	扇ガ谷	階段横やぐら (浄光明寺境内) X1Y2				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-13	扇ガ谷	階段横やぐら (浄光明寺境内) X2Y2				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-14	扇ガ谷	綱引地藏やぐら (浄光明寺境内)				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-15	扇ガ谷	多宝寺跡やぐら				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-16	扇ガ谷	葉王寺やぐら				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Og-17	扇ガ谷	妙伝寺やぐら				0				泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かれればここに記入
Og-18	扇ガ谷	東林寺跡やぐら	不明			0	不明			泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
Og-19	扇ガ谷	泉ヶ谷やぐらX1	不明			0	不明	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	建物裏のため調査不可		
Og-20	扇ガ谷	泉ヶ谷やぐらX2	不明			0	不明	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	建物裏のため調査不可		
Og-21	扇ガ谷	相馬師常墓やぐら群 X1Y1	不明			0	不明	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	私有地内により近づけない 物置として転用		
Og-22	扇ガ谷	相馬師常墓やぐら群 X2Y1	不明			0	五輪塔の残骸らしきものが大量	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	柵があり近づけない		
Og-23	扇ガ谷	伝相馬師常墓	不明			0	五輪塔…一石造り、宝篋印塔、燭台…一対 石造、	長方形	壁に四角形のくぼみ、棚、龕 (塞がれている)	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	扉で閉ざされている、完全な状態で残っている、龕が切り石でふさがれ、かつ切り石は現存	宝篋印塔…室町、五輪塔…不明	
Og-24	扇ガ谷	相馬師常墓やぐら群 X1Y2	不明			0		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	風化が進んでいる 複数穴が玄室内にあり		
Og-25	扇ガ谷	薬王寺南やぐら群 X1	不明	不明	不明	0		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	私有地内により近づけない 物置として転用		
Og-26	扇ガ谷	薬王寺南やぐら群 X2	不明	不明	不明	0		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	私有地内により近づけない 物置として転用		
Og-27	扇ガ谷	薬王寺南やぐら群 X3	不明	不明	不明	0		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	私有地内により近づけない 物置として転用		
Og-28	扇ガ谷	勝縁寺谷やぐら	不明			0		長方形		泥岩砂岩五層 (三浦層群逗子層主部)	私有地内により近づけない		
Og-29	扇ガ谷	扇ガ谷北やぐら		120	110	13200		長方形		泥岩砂岩五層 (三浦層群逗子層主部)			
Og-30	扇ガ谷	唐草やぐら群 (実朝墓)		175	180	31500	五輪塔 (大きい) × 1、卒塔婆 × 1、その他石切多数	長方形	壁に多数の穴	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	完全な状態で残っている		
Og-31	扇ガ谷	(政子墓)		135	165	22275		長方形	壁に多数の穴	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	完全な状態で残っている		
Og-32	扇ガ谷	巨福呂坂内やぐら (東国歴史考古研究所ナンバリング順)		118		118		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	後世に形状が改変された可能性大		
Og-33	扇ガ谷		179	201	163	32763		長方形	壁龕	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	崩落激しい		
Og-34	扇ガ谷					0				泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	便所として転用されているため原型確認不可		
Og-35	扇ガ谷	大	460	420	222	93240		長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	風化の影響大		
	扇ガ谷	平均	288	313.3	155	48566.7							
Kk-1	片瀬腰越	妙典寺北やぐら	不明	160	130	20800	不明	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	草に埋もれているため測定不可		

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かればここに記入
Kk-2	片瀬腰越	小動やぐら群 x 1	不明	180	100	18000	不明	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	草に埋もれているため測定不可		
Kk-3	片瀬腰越	小動やぐら群 x 2	不明	160	120	19200	不明	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	草に埋もれているため測定不可		
Kk-4	片瀬腰越	小動やぐら群 x 3	不明	160	100	16000	不明	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	草に埋もれているため測定不可		
	片瀬腰越	平均		165	112.5	18562.5							
Gk-1	極楽寺	極楽寺旧境内遺跡内やぐら群 (東国歴史考古学研究所ナンバリング順)			140	140	かわらけ×2、スタンプ (滑石鍋の転用、桐文様)、砥石、銅銭		横穴墓転用型	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			スタンプ…滑石、砥石…流紋岩質細粒凝灰岩
Gk-2	極楽寺		260	270	160	43200	かわらけ	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	天井崩落		
Gk-3	極楽寺	同やぐら群その2				0				泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
	極楽寺		260	270	150	40500							
Sa-1	佐助長谷	松谷寺跡やぐら群 (東国歴史考古学研究所ナンバリング順)	211	265	150	39750	骨蔵器、常滑、ネズミの骨	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Sa-2	佐助長谷	小↓	104	126	100	12600	五輪塔 (空風、火、水、地、梵字が彫られている、金箔付き、中に火葬骨) かわらけ×12	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			五輪塔…砂質凝灰岩
Sa-3	佐助長谷		209	213	129	27477	五輪塔 (全×2、梵字あり) 火葬、土葬骨、かわらけ×7	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Sa-4	佐助長谷		110	116	107	12412	かわらけ×3	正方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	天井崩落		
Sa-5	佐助長谷		64	90	97	8730	泥岩塊	正方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Sa-6	佐助長谷		56	67	75	5025	泥岩塊	正方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Sa-7	佐助長谷		96	175	133	23275	火葬骨、五輪塔 (空風)、土葬骨、かわらけ×9	長方形	納骨穴あり	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			五輪塔…砂質凝灰岩
Sa-8	佐助長谷		91	95	74	7030	泥岩塊、五輪塔、かわらけ×6	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Sa-9	佐助長谷		52	66	70	4620		正方形	納骨穴あり	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	風化の影響大		
Sa-10	佐助長谷		36	56	57	3192		正方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	風化の影響大		
Sa-11	佐助長谷		116	140	115	16100	常滑製骨臓器、男瓦女瓦多数、五輪塔 (火、地)、火葬骨	長方形	納骨穴あり	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			火輪…凝灰質砂岩
Sa-12	佐助長谷	小↑	71	99	75	7425	かわらけ×4、瓦の一部、火葬骨	長方形	納骨穴あり	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	天井崩落		
Sa-13	佐助長谷		97	104	不明	104	かわらけ×6	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	天井崩落		
Sa-14	佐助長谷	松谷寺やぐら群 (東国歴史考古学研究所ナンバリング順)	196	182	156	28392	五輪塔×2、火葬骨、瀬戸製仏華瓶	長方形	納骨穴あり、壁龕あり	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Sa-15	佐助長谷		134	136	121	16456	板碑	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			板碑…緑泥片岩
Sa-16	佐助長谷	小↑	134	134	104	13936	火葬骨、五輪塔×2、	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かれればここに記入
Sa-17	佐助長谷	松谷寺跡内やぐら	不明	384	不明	384	泥岩塊、常滑製土管、七輪 (?)	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	玄室ほぼ消失		
Sa-18	佐助長谷	長楽寺南やぐら群	414	415	262	108730	かわらけ×4、常滑製窯	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	天井崩落		
Sa-19	佐助長谷		420	410	193	79130	かわらけ、瀬戸製行平鍋、青磁製皿×2、青磁製香炉	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	天井崩落		
Sa-20	佐助長谷		696	660	314	207240	かわらけ、釜、瓦質手盛り×2、青磁製皿、燭台、天目台、陶器製有耳壺、砥石	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	天井崩落		
Sa-21	佐助長谷		525	566	488	276208	かわらけ×7、瓦質手盛り、瀬戸製小壺、皿×6、花盆×2、仏華瓶、常滑製こね鉢、釜甕×5、白磁製皿、青白磁瓶、香炉、青磁製花瓶、小杯、杯、盤、磁州釜か黒釉鉄絵、均窯白濁釉、褐釉陶器花盆、同製品の耳かき	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
	佐助長谷	平均	191.6	214.2	148.4	31797.4							
Yo-1	雪の下大町	紅葉山やぐら				0		長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Yo-2	雪の下大町					0		長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Yo-3	雪の下大町	北条高時腹切りやぐら				0		長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	崖崩れのため封鎖中		
Yo-4	雪の下大町	大倉幕府北やぐら群 (神奈川考古学財団ナンバリング順)	485	544	235	127840	硯×1、陶磁器×15 (白磁、瀬戸物、美濃焼、瀬美焼、常滑、備前焼)、かわらけ×38	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Yo-5	雪の下大町	小	165	213	120	25560		長方形	横穴墓転用型	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Yo-6	雪の下大町		295	260	170	44200		長方形	横穴墓転用型	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Yo-7	雪の下大町	小	115	61	95	5795	かわらけ×2	長方形	横穴墓転用型	泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
	雪の下大町	平均	265	269.5	155	29056.4							
Kt-1	北鎌倉	円覚寺境内のやぐら	220	170	250	42500	地藏菩薩×1	上半円型		凝灰質泥質砂岩及び凝灰質砂岩 (上総層群野島層)			
Kt-2	北鎌倉	松嶺院のやぐら	不明	80	180	14400	なし	不明	形がカオス	沖積層 (砂泥及び礫)			
Kt-3	北鎌倉	建長寺やぐら群 (左から)	280	300	180	54000	なし	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Kt-4	北鎌倉	大↑	250	300	250	75000	なし	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Kt-5	北鎌倉	小	30	60	70	4200	墓石×2、無縫塔×2、不明×1	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Kt-6	北鎌倉	大	180	300	180	54000	なし	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Kt-7	北鎌倉		280	300	140	42000	なし	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)	草に埋もれているため測定不可		
Kt-8	北鎌倉	北鎌倉山ノ内のやぐら		280	180	50400		長方形	奥にもう1部屋あり	沖積層 (砂泥及び礫)			
Kt-9	北鎌倉	西瓜ヶ谷やぐら群		370	180	66600	五輪塔 (掘り込み) 大×2、中×11、小×1	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	風化を受けている		
Kt-10	北鎌倉	小↓		120	150	18000	無縫塔?×2 石仏? (風化済み)×1	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	風化を大きく受けている		

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かればここに記入
Kt-11	北鎌倉			100	100	10000	五輪塔×1、無縫塔×1	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	風化を大きく受けている		
Kt-12	北鎌倉	小↑	110	175	135	23625	宝篋印塔×1、無縫塔?×1、石切×3	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	漆喰らしきものあり		
Kt-13	北鎌倉				120		宝篋印塔×1、五輪塔×1	長方形		凝灰質砂岩及び礫岩 (上総層群浦郷層)	風化でほとんどなくなっている		
	北鎌倉	平均	192.9	212.9	162.7	34639.9							
Jo-1	浄明寺	宅間谷東やぐら群 (神奈川県考古学財団ナンバリング順)	1040	440	240	105600	資料2を参照	長方形	2つ連なっている	泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)		資料2を参照	
Jo-2	浄明寺		500	390	235	91650		長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Jo-3	浄明寺		436	618	240	148320	陶磁器×3、かわらけ×3	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Jo-4	浄明寺		507	508	229	116332	陶磁器×2、かわらけ×2	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Jo-5	浄明寺		390	412	210	86520	陶磁器×2、かわらけ×3、丸太材	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Jo-6	浄明寺		457	425	247	104975	陶磁器×1、銅銭×1	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Jo-7	浄明寺		287	390	217	84630	かわらけ (かけら) ×4、常滑 (かけら) ×3	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
Jo-8	浄明寺		482	403	245	98735	かわらけ×1	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Jo-9	浄明寺	大↑	420	445	220	97900	砥石	長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)		砥石…流紋岩質凝灰岩製	
Jo-10	浄明寺		297	250	122	30500		長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
Jo-11	浄明寺	大	290	290	192	55680		長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
	浄明寺	平均	464.2	415.5	217.9	90551.1							
No-1	名越大町	衣張山 H.C.道中	60	120	115	13800		長方形		泥岩砂岩互層 (三浦層群逗子層主部)			
No-2	名越大町	日月やぐら群 (教育委員会ナンバリング順)	120	135	110	1782000	五輪塔 (集積型、地+空、火、地) かわらけ (14c前)	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)	天井が崩落している		
No-3	名越大町		150	170	120	3060000	五輪塔、かわらけ (14c前)	長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
No-4	名越大町	(日月やぐら)	220	285	130	8151000	五輪塔 (集積) ×8 (うち完全系×2)	長方形	入口に木材立てたあと、納骨穴×9 (そのうち1つ火葬骨入り)、龕あり	泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
No-5	名越大町		160	210	130	4368000	五輪塔×3 (中央の物は水、地)、かわらけ欠片	長方形	納骨穴あり	泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
No-6	名越大町		160	205	125	4100000		長方形	納骨穴×4~5	泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)			
No-7	名越大町		120	150	120	2160000		長方形		泥岩及び火山砕石岩互層 (三浦層群池子層主部)	埋まっている		

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かれればここに記入
No-8	名越大町		110	165	110	1996500	五輪塔 (集積) × 3	長方形	納骨穴 × 2 ~、龕 (中に五輪塔) 玄室、床羨、道壁に木材はめ込んだ跡	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
No-9	名越大町	唐糸やぐら	330	400	180	23760000		長方形	柱穴 × 4	泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)	状態がいい		
No-10	名越大町	地藏やぐら	300	480	220	31680000	地藏菩薩 (上半身モルタル補修済み) × 1	長方形		泥岩及び火山砕石岩五層 (三浦層群池子層主部)			
	名越大町	平均	173	232	136	8107130		正方形					
Zu-1	逗子	こんびらやぐら	80	140	100	14000		長方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-2	逗子		80	120	130	15600		正方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-3	逗子		60	140	120	16800		正方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-4	逗子			140	100	14000		長方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-5	逗子		120	170	100	17000		長方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-6	逗子		130	110	110	12100		正方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-7	逗子			130		130				安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-8	逗子			140		140				安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-9	逗子		60	65	70	4550		正方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-10	逗子		80	120	100	12000		正方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-11	逗子			150	80	12000		長方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)	風化を大きく受けている		室町時代
Zu-12	逗子			120	80	9600		長方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)	風化を大きく受けている		室町時代
Zu-13	逗子				80	80				安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)	風化を大きく受けている		室町時代

整理記号	エリア	名前	奥行	幅 (cm)	高さ	入口面積	副葬品、塔	切り口	その他形	主な岩石	備考 (見学状況、風化状況など)	供養塔の材料がわかればここに記入	時代が分かれればここに記入
Zu-14	逗子		60	90	110	9900		正方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-15	逗子		100	130	120	15600		正方形		安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-16	逗子		120	120	130	15600		正方形	納骨穴がわかりやすい	安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
Zu-17	逗子	小↑	110	90	110	9900		正方形	納骨穴がわかりやすい	安山岩質及び玄武岩質火山砕石岩 (三浦層群池子層高取山火山岩部層)			室町時代
	逗子	平均	90.9	123.4	102.7	10529.4							

資料2 宅間谷東やぐら1号墳出土品一覧

a: 五輪塔

空風×4 (うち2つは安山岩製、残り2つは凝灰岩製)、火×5 (うち2つは凝灰岩製、残りは安山岩製)、水×6 (すべて安山岩製)、地×7 (うち3つは安山岩製、残りは凝灰岩製)、水地×1 (凝灰岩製)、一石 (火水) ×1 (凝灰岩製)

b: その他石塔

宝篋印塔 (塔身) ×1 (安山岩製)、宝篋印塔 (基礎) ×2 (すべて安山岩製)
その他×2 (どちらも凝灰岩製)

c: その他石製品

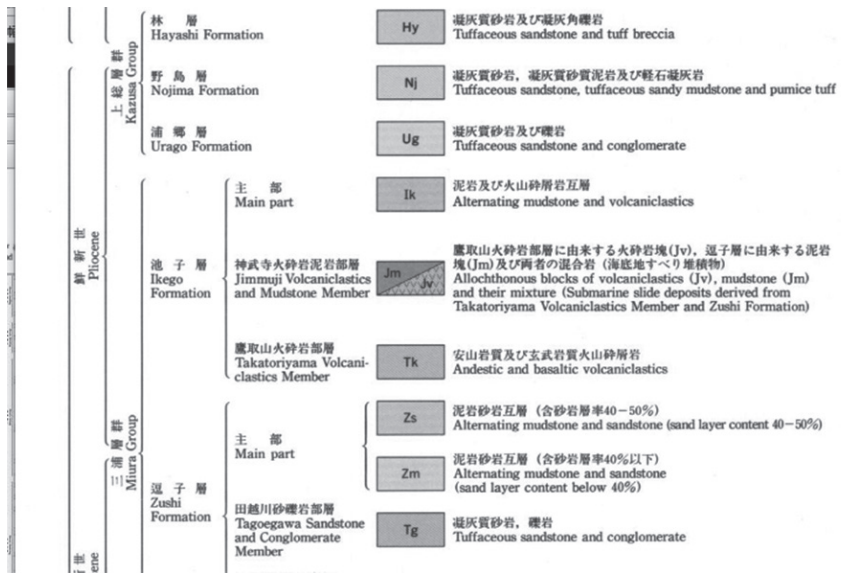
砥石×1 (流紋岩質安山岩製)

d: 陶器など

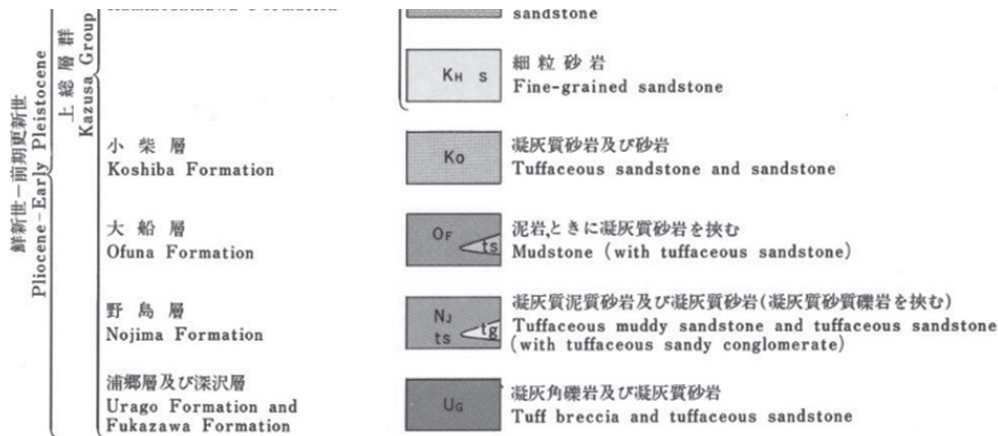
陶磁器×12 (瀬戸物、肥前、青白磁、かわら、常滑)
かわらけ×20

資料3 産総研地質図凡例

横須賀



横浜



「ええじゃないか」騒動の発生と展開に関する一考察

—なぜ人々は踊ったのか—

東京学芸大学附属高等学校2年 ないとう 内藤 たかのり 孝典

1. はじめに

約270年続いた徳川泰平の世、江戸時代が終わりを告げようとしていた慶応3（1867）年夏、東海・近畿地方を中心に、伊勢神宮や諸社寺のお札が降ったとあって民衆が狂喜乱舞するといういわゆる「ええじゃないか」騒動が起こった。この騒動こそこれから本文で取り上げる主題である。

筆者は中学生時代に社会科の授業でこの出来事を知った。当時教えていただいていた先生は「ええじゃないか」について多くの見識をお持ちで、社会の授業を一時間使って、本文でも参考にしたような先行研究の書籍や成果について詳しく紹介された。そして、この騒動の発端について、最近まで多くの説が存在し定まっていなかったこと、また誰がこの騒動の背後にいたのかは今でも分かっていないということから、教科書に載っているような歴史にもまだ詳しく分かっていないことがあり、新たな発見が為されれば次々に変化してゆく、つまり歴史は生きた学問なのだという旨の話をされた。この先生の言葉とともに、「ええじゃないか」騒動の謎は現在まで筆者の心の片隅に残り続け、いつかは自分でその謎に向き合ってみたいという気持ちを強く持っていた。今回高校で研究の機会を得たため、文献調査と2回のフィールドワークを経て拙い本文を執筆するに至っている。

「ええじゃないか」とはどのように始まったのだろうか。また、どのように拡大し、その要因とは何だったのか。先行研究を踏まえ、学際的に新たな視点を導入しながら考えてゆきたい。

2. 「ええじゃないか」とは

「ええじゃないか」はある一つの事件というのではなく、同じような形式の出来事が各地で同時期に複数起こっており、それらを総称したものである。一般的な「ええじゃないか」の流れは次の通りである。まず、道や庭先に落ちているお札を人が拾う。それを組頭など住民の中のリーダーに届け出る。家の者は見つけたお札を祀る。このような、お札が道や庭先など本来あるべきでない場所で見つかる現象を「お札降り」と呼んだ。名前の通り当時の人々はお札が天から降ってきたと考えていたのである。次に、「お札降り」のあった家の者はお札が降ったということで近所の人々を招き神事や宴会を行って祝う。この際、御神酒や食べ物を訪れた者に対して無償でふるまった。また、地域の寺社に集団で参拝するなどした。そういった宴会や集団行動が次第に秩序を失うことで、民衆による騒乱状態が生まれたとされている。その際の掛け声が西国の地域で「えいじゃないか、えいじゃないか」といったものだったため、この民衆による騒動を総称して「ええじゃないか」と呼んでいる。お札は各地で降り、そのたびに神事祭礼が行われたため、「ええじゃないか」騒動は「お札降り」と合わさる形で拡大していったとみられる。



図1、「豊饒御廩参之図」、慶應3（1867）年、豊橋市美術博物館蔵、
（岡崎市美術博物館、2017）より引用

3. 「お札降り」と「ええじゃないか」の語の意味

ここで曖昧さを回避するため、本文で使用する語句の整理をしておく。まず、道や庭先など通常ありえない場所で伊勢神宮をはじめとする各地の寺社の神符（お札）などが見つかる出来事を、当時の記述から「お札降り」と呼称することにする。もちろん本当に天から降ったものではなく、誰かが作為的に撒いたものだが、当時の呼称に準ずることにする。次に「お札降り」を含む、それに伴う神事や祝宴、またその後の民衆の騒乱状態全体について「ええじゃないか」と呼称することにする。つまり、「お札降り」があっても「ええじゃないか」まで発展しないケースも存在する。また、どこまでを「ええじゃないか」の範囲に含めるのかという問題があるが、「お札降り」と神事に加え、従来の神社や村組織に基づかない無秩序な参詣や祝祭、仮装、裸踊り等々を基準に考えてゆきたい。ただ、この定義の問題は今後の「ええじゃないか」研究でも常に議論し改められてゆくべき事案である。

「ええじゃないか」という言葉は、土屋喬雄が『中央公論』昭和6（1931）年12月号で発表した「維新史上のナンセンス」のなかで「えいじゃないか」あるいは「ええじゃないか」という囃子言葉とともに騒動を紹介したことによるもので、以後騒動全体を指す名称として定着した。つまり、「お札降り」という語は各地の一次史料において散見されるが、「ええじゃないか」という語はのちの時代に生まれた語である。高木俊輔は騒動の呼称について次に引用するような表にまとめている（表1）。高木によれば「えいじゃないか」という囃子言葉はあっても、実際に「ええじゃないか」という囃子言葉が使われた地域は確認できないという（高木、1979）。「えいじゃないか」、「よいじゃないか」という囃子言葉は伊勢以西の地域で多く見られる。当時の人々は、例えば駿府では「六根清浄」といったり、ほかの地域では「おかげ」（「御蔭」、「御賀げ」）や「おかげ騒ぎ」、また単に「お札降り」といったりしていた。また、この「おかげ」に類する表現も「ええじゃないか」において「おかげ参り」の影響が表れていることを示している。



図2、『御代の栄』部分

慶應3（1867）年、豊橋市美術博物館蔵。
 京都でのお札降りについて絵を交えて記録している。「よいしょよいしょ」や「よいじゃないかよいじゃないか」という囃子言葉がある。

国名	お札降り関係	乱舞関係	囃しことば関係
武蔵 (含江戸)	天降り	世直し踊	六根清浄
相模	お札下り・天降り	はだか参り	
伊豆		裸参り・豊年踊	六根清浄・おかげさん
駿河	御札降・お下り (秋)	はだか参り・振舞	六根清浄
遠江	御札降り・御札下り・御降	御茶・豊年踊・大騒	
甲斐	お札降		
信濃	御札(様)降り	{御札祭・豊年おどり ヤッチョロ祭・おかげ 祭り おかげ	{ このおかげさん チョトサ (長土蔵)
尾張 (名古屋)	御札降		
美濃	御札降	天降神祭・豊年祭り	
伊勢		おかげ・直おかげ	えじゃないか
近江		大踊り	ヨイジャナイカ
山城 (京都)		をかげ踊	ヨイジャナイカ・えいじゃないか
摂河泉 (大坂)	お敷様降り・御敷落・御降り	{おかげ・俄躍り 御隆踊・長州躍り	{ イイジャナイカ・ギヤトセドンドン エジャナイカ
紀伊	御政降り		コイジャナイカ・えやないか
淡路		雀踊	よいじゃないか
阿波		えじゃないか踊り・大踊	えいじゃないか
備後	守札降り		エジャナヒカ・長ト薩トエジャナヒカ
安芸	守札降り・御降り	{手躍り・狂躁踊り 世直し躍り	エジャナヒカ

表1、「ええじゃないか」の呼称、(高木俊輔、1979)より引用

4. 「ええじゃないか」の発生

「ええじゃないか」研究において30年ほど前まで重要な研究課題とされていたのが、「ええじゃないか」はいつ、どこで始まったのかという問題である。従来は、名古屋発生説が有力だったが、西垣晴次が『磐田市史』の記述をもとに8月15日の東海道宿場見付、宮小路髪結松五郎方への「お札降り」を最初として紹介した(西垣、1973)ことなどから遠江発祥説が広がった。その後、豊橋市の羽田八幡宮神官、羽田野敬雄の『萬歳書留控』の記述によって、7月22日以前に吉田宿近郊の村々のどこかで始まったと

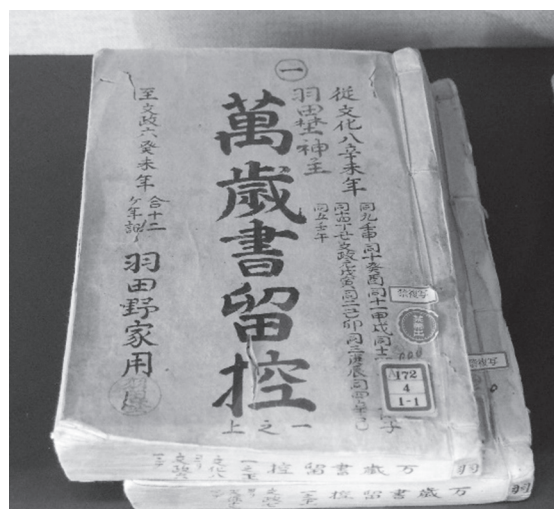


図3、『萬歳書留控』、羽田野敬雄、豊橋市立中央図書館蔵

いうところまではわかっていた。そんな中、最初の「お札降り」と「ええじゃないか」について現在まででもっとも有力なのが、7月14日の吉田宿牟呂村の「お札降り」を最初とする説である。この根拠とされているのが『留記』である。『留記』は豊橋市にある牟呂八幡宮の当時の宮司、森田光尋によって記されたもので、牟呂における慶応3年の「お札降り」について詳しく記されている。これを解読することで牟呂村における最初の「お札降り」の全貌を知ることができる。『留記』については田村貞雄の著書（田村、1987）で詳しく紹介され、渡辺和敏の著書（渡辺、2001）に解説とともに全文が掲載されている。なお、本文における『留記』の引用はこの渡辺の著書によった。

5. 牟呂村での最初の「お札降り」

では、最初の「お札降り」について『留記』本文と「牟呂之神異」の項をもとに見てゆく。

慶応3（1867）年7月14日七ツ時（午前4時ごろ）上牟呂村の一部である王西村（大西村と表記）の多治郎という人の屋敷の東の竹垣に伊勢神宮外宮の御祓（お札）があるのを、たまたま通りかかった王海津村（大海津と表記）の人が見つけたという。なお、王海津村とは牟呂村の西にあった村である。だが、その人は特に驚くことなく通り過ぎてしまった。「此者少し下愚也」（『留記』、神異）という注があることから、田村は「御祓を見過ごしたことに多少の非難がこめられているようである。」（田村、1987）としている。また、その後子供が通った。続く記述がないことから、この子も何もしなかったとみられる。続いて、王西村源三郎屋敷の富吉という人が通りかかって、お札があった多治郎宅の隣の組頭富蔵の家へ届けた。しかし、富蔵は源三郎の妻が死んだばかりで穢中であるとして、清治郎という人のところに持って行くように言った。富吉はそのお札を言われたとおりに清治郎へと届けるのだが、このお札について「清治郎も此もちゆきし富吉も甚うたがひけり」（留記、神異）とある。というのも、そのお札には「御師内山八郎太夫」という御師の名前が書かれていたからである。文政のお札降りの際には「御師之名ある御祓ふりし事なかりき」であったので、二人は「いぶかしといひて、いたく疑ひけり」というわけである。（ともに留記、神異）だが、富吉はともかくお札を清治郎に預けて帰宅した。その夜、富吉の8歳の男の子が病気でもないのに死んでしまったという。『留記』は「されど神罰とハおもはさりけり、」と付け加えている。すなわち、『留記』はこの男の子の死が、富吉がお札を疑ったことに対する神罰だととらえているのである。

同じ7月14日の夕暮れ、天王社（牛頭天王社）の東の「シコ名をトコナベ」という人が、友蔵という人に、「いせ

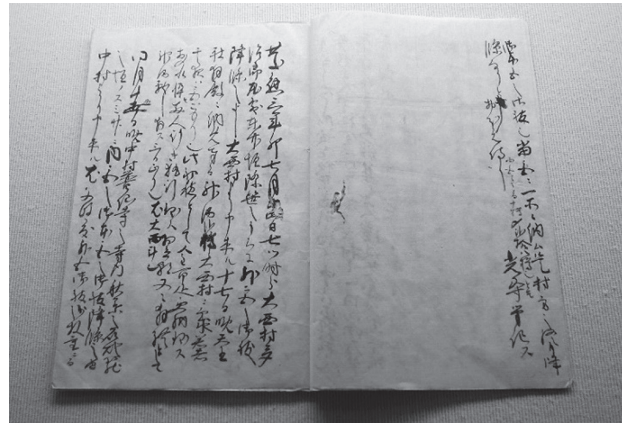


図4、『留記』、森田光尋、
慶応3（1867）年、豊橋市美術博物館寄託



図5、太神宮剣先札、
豊橋市美術博物館寄託

の御祓ふりしなといひさわく、その御祓にハス、はつかぬか、おほかたす、びたりけん」(留記、神異) (伊勢のお札が降ったなどといって騒いでいるが、そのお札には煤はついていないのか、大方すすびたりだろう) と言っていぶかしがっていた。これは、降ったお札というのは誰かが自分の家から持ち出したもので、(家に長年あるお札は炊事の煙などで次第にすすけてゆくので) お札には煤がついているに違いない。つまり、この「お札降り」は誰か人が仕組んだことだと主張しているとみられる。そのような発言をした「トコナベ」の妻は、13日から「おこり」を患っていた。「おこり」(瘡)とは熱病の意である。その妻が15日になって「ふるひながら精霊祭を起てしける」とある。つまり、精神に異常を来して、「その夜半はかりに死き、」という。

ここで周囲の人々は、富吉の子供の死と「トコナベ」の妻の死とを結びつけて考え、『留記』曰く二人は「いたくうたがひしために、かゝる神罰のありし也、」とし、また「此二人ハもとより信心のなきものにて、心よろしからぬものなり、おそるべし、つゝしむへし、かならすうたかふべからず、」とまで書いています。このように、人々が二人の死を神罰、また「神威」として捉えたことが、のち



図6、現在の牟呂八幡宮

の「ええじゃないか」騒動に多くの人々が関与するに至る心理的要因となったと考えることができる。また、この「神威」の意識は後に示す脅迫行為においても大きな意味を持っている。

「お札降り」は止まらない。『留記』の「牟呂之神異」によれば、15日の夕暮れには、牛頭天王社の中の庚申の東(本文には行者之東とある)の雑木の枝に「磯部の御祓」(伊雑宮のお札)が降っている。それには「世古長官」と書かれていたという。

一方、『留記』本文には同じく15日の晩に中村普仙寺の敷地内にある秋葉の石灯籠の隅の竹に伊勢神宮内宮のお札が降ったと記されている。『留記』を記した森田光尋は父親の森田光義から文政の御蔭参りについて伝え聞いており、それによれば、伊勢外宮のお札が二枚重ねて村方へ降ったので社宮神社に納めたという。光尋はこれに基づいて17日の七ツ時に文政13(1830)年に使用したお祓箱にお札を取め神事を行った。これが慶応3年の「お札降り」に対する最初の神事とされている。その後、2つ目に示した伊雑宮の「お札降り」から祭礼の様子が一変する。それは森田光尋がこれを重視したためで、「二夜三日正月」という臨時祭礼が行われた。『留記』によればこれらの神事についても、森田光尋が父からの文政の御蔭まいるの伝承に従って執り行ったとしている。

この祭礼について、森田光尋と牟呂村のなかの三つのグループの代表者とで話し合いがなされたが、このうち中牟呂だけは若者らによる「故障」があり、祭礼への参加を見送っているのである。渡辺はここに注目して、この若者たちの「故障」は彼らが独自で祭礼を行ったことを意味しており、村の指導者の統制から外れていることから、「ええじゃないか」騒動につながるものがあるとしている(渡辺、2001)。これまで見てきた『留記』や『萬歳書留控』は指導的役割の人間が公的に記したものであるため、民衆の詳しい動向にあまり触れないが、この「故障」の記述に「ええじゃないか」への展開の発端を見ることは可能であると思われる。ただし、「ええじゃないか」が前掲のような体裁をとって拡大するのは次に記す通り騒動が東海道吉田宿に波及してからのことである。

6. 「ええじゃないか」の拡大

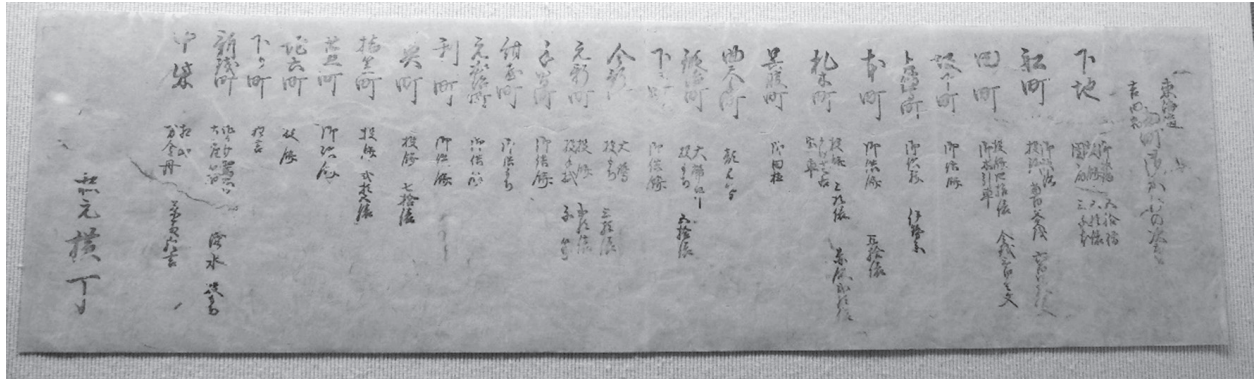


図7、「東海道吉田宿惣町御かけの次第」、江戸時代後期、豊橋市美術博物館蔵

これまで、牟呂村で見つかった伊勢神宮の神符を人々が「神威」として捉え、神事を行った流れや、若者たちによる「ええじゃないか」の狂乱につながる「故障」という動きがあったことをみてきた。この牟呂での出来事の最中から、羽田など周辺の村々や吉田宿でも「お札降り」が起り始め、それが広がるとともに「ええじゃないか」も拡大していった。図7は「お札降り」に対する吉田宿での対応をまとめたもので、複数印刷されて東海道の東西の宿場に伝達された。このような情報の拡散と「お札降り」が同時に起こったため、「ええじゃないか」の騒動は拡大していった。具体的には図8に示すごとくである。図8は各地の最初の「お札降り」が起こった日付を地図上に表示したものである。

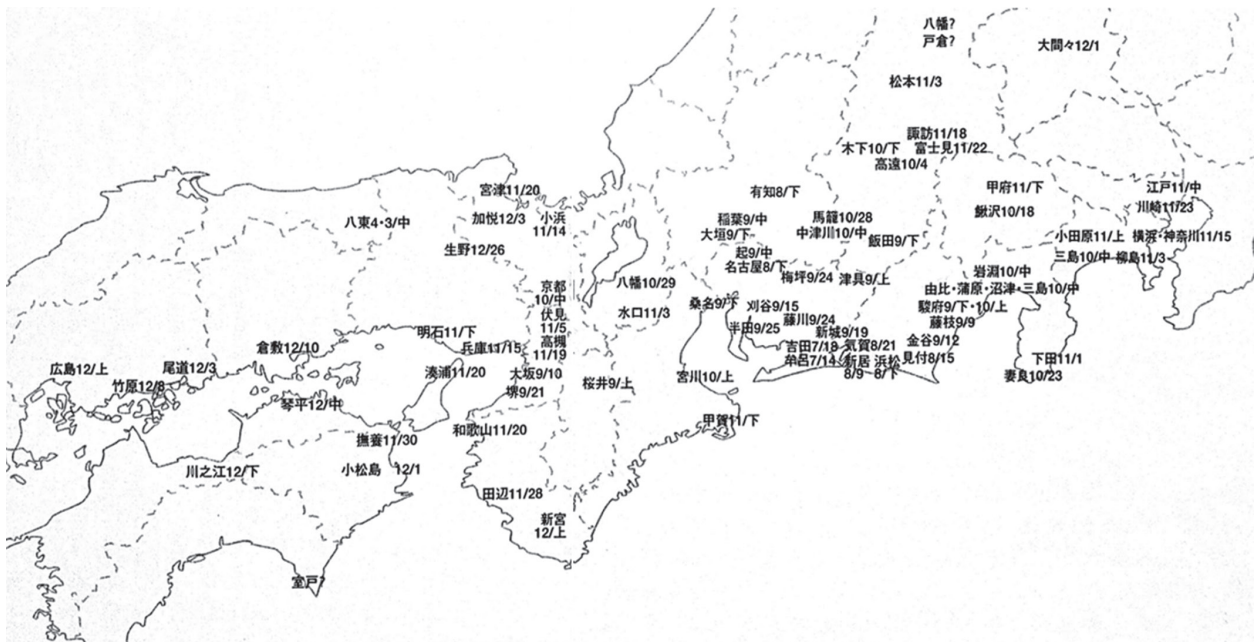


図8、「ええじゃないか」の拡大、(豊橋市美術博物館、2003)より引用

最初の「お札降り」は先述のように7月14日に牟呂村に起こったが、その約1週間後には騒動は吉田宿に波及し、そこから多少日付の前後はあるものの、東海道筋を西と東に分かれて進み、慶応3(1867)年の終りまで続いていることが読み取れる。

慶応3年の「ええじゃないか」に関する各地の記録を見比べると、東海道の宿場町や近郊の村々では「お札降り」の記録が多く残されており、神事や宴会、集団参詣、幕府の規制など、その後の

「ええじゃないか」につながる動きを読み取ることができるが、東海道から離れた山村などでは「お札降り」の記録から存在しない地点も多く、お札が降っても「ええじゃないか」につながる動きはあまり見られない。即ち、「ええじゃないか」の伝播において東海道は非常に重要な役割を果たしたのである。

7. 慶応3年の経済

この項では、当時の経済状況が「ええじゃないか」に与えた影響についてみる。

宇野幸男がまとめた『刈谷藩に関する研究』は、江戸時代の刈谷藩の実情を知るうえで重要である。宇野は慶応年間（1865-1868）の刈谷藩内の月ごとの米価についてまとめた表を掲載しているため、それをもとにグラフを用いて視覚化した。

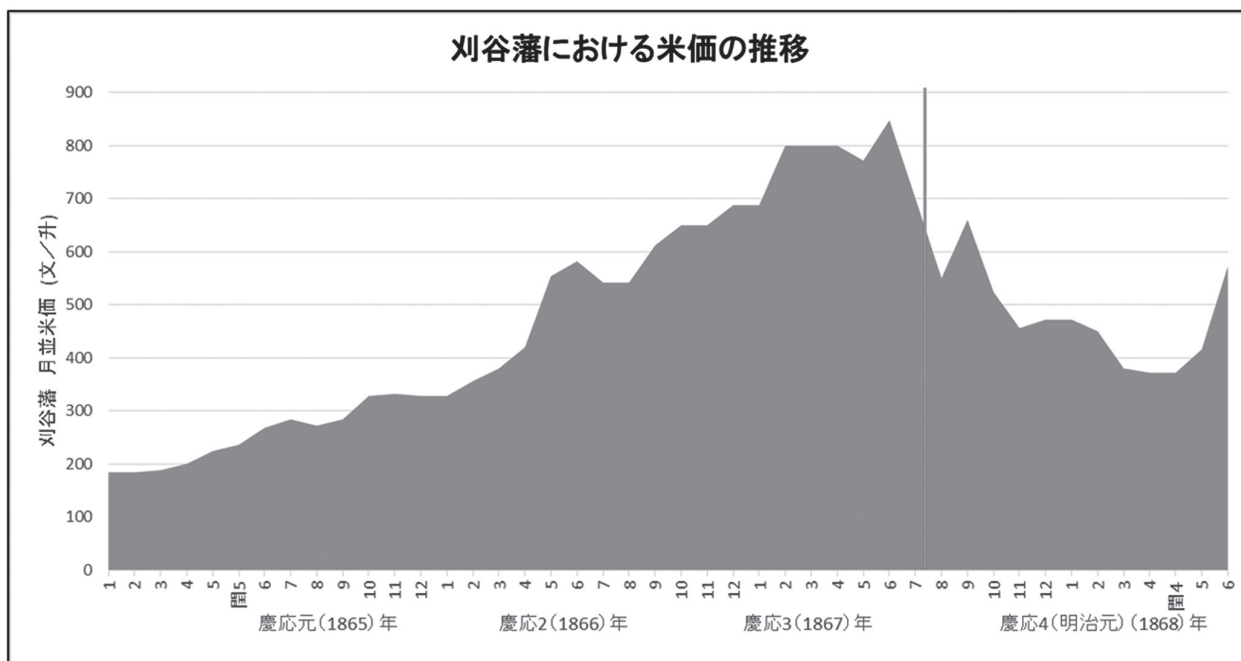


図9、刈谷藩における米価の推移、(宇野、1959) 掲載値より作成

このグラフを見ると、米価は年々上昇の一途をたどっているが、ある一時期から下落し始めている。牟呂において最初の「お札降り」がみられた慶応3年7月中旬はちょうど米価が下がり始めた時期である。この要因は何かといえば、前年に代わってこの年は米が豊作となる見込みであったからで、実際そのようになっている。今の世の中でもそうだが、一般に景気が上向くと人々の気分も高揚するものである。慶応3年6月は米価が約10年前の安政4（1857）年1月の84文/升（宇野、1959）に対して、10倍以上の848文/升（宇野、1959）に高騰しており、米が経済の中心にあった江戸時代において、相当の異常事態であったことは容易に想像できる。ゆえに民衆は「豊年」ということを以前にも増して強く意識したといえる。例えば図1の絵の名前は「豊饒御蔭参之図」（ほうねんおかげまいりのず）であり、また、表1において「豊年踊」という名称がみられる。さらに、『留記』によれば、7月17日の神事の際、「三百年は大豊作の古哥」が謡われたという。

このように、こうした異常事態からの回復と「豊年」の兆しが、民衆を神仏に対する一層の信仰に向かわせたと考えられることができる。

8. 伊勢信仰と「ええじゃないか」

これまで慶応3年の「ええじゃないか」について単独で考えてきたが、この騒動の背景にはそれより前の民衆による信仰が大きく影響している。それはすなわち伊勢信仰である。「一生に一度は伊勢参り」という言葉があるように、江戸時代の民衆は盛んに伊勢神宮に参拝した。人々は各地で伊勢講を結成し、若い男を中心に代参者を募って村の各家から資金を集め、村の援助のもとで伊勢神宮への参拝に向かわせた。これがいわゆる「伊勢参り」である。当時の人々は現在のような自由な旅行は許されておらず、「伊勢参り」は人々が旅行を楽しむ機会でもあった。

「伊勢参り」と別に、「抜け参り」がある。「抜け参り」とは往来手形を持たず、あるとき突然人々が自分の仕事を放棄して、主人や親の許可を得ずに伊勢神宮へ参拝するものである。江戸時代には現在のような週休二日制はなく、人々が仕事を休むことができたのは盆、正月に加え、季節の変わり目や庚申講の祝祭のときなどに限られていた。そのため、多くの地域で「抜け参り」は黙認されていた。また、この「抜け参り」は女性や子供が伊勢神宮に参拝できる貴重な機会であった。こうしたこともあって、本来違法であるのだが「抜け参り」という参拝方法も頻繁に取られるようになった。

さらに「おかげ参り」という参拝方法もあった。これは以前から「ええじゃないか」との多くの類似点が指摘されている。「おかげ参り」は「ええじゃないか」同様に神仏のお札が降下することに始まり、人々が一斉に伊勢神宮に参拝するというものである。おおよそ60年に一度の周期で起こったとされ、西垣によると慶安3（1650）年、宝永2（1705）年、明和8（1771）年、文政13（1830）年の4回が挙げられるという（西垣、1973）。ただし、このお札の降下は単にきっかけに過ぎず、「ええじゃないか」における「お札降り」とは一線を画すものといえる。それを示すように、「おかげ参り」についての絵や書籍には、お札が降る様子を描写したものはほぼ存在しないのに対して、慶応3年の「ええじゃないか」では図1をはじめ「お札降り」を特にクローズアップして描写している。こうしたことから「ええじゃないか」の特異性を見ることができる。

こうした民衆による伊勢への参拝には街道筋の宿場の援助は欠かせないものであった。図10は「伊勢参り」に際して宿場から施行された駕籠や伊勢神宮外宮で参拝者に施し米が行われている様子である。一見するとこうした施しは街道筋の人々にとって無駄な出費に思えるのだが、当時の人々は伊勢神宮への参拝者を助けることで自らの神への信仰を示し、徳を積むといった意識があったと考えられる。このように「おかげ参り」とそれに伴う街道筋の支援という仕組みは、民衆にとっておおよそ60年周期の「おかげ参り」が強く意識されるようになった明和、文政の「おかげ参り」によって形作られ、「ええじゃないか」もこの下地の上で急速かつ広範な拡大を見せたといえる。

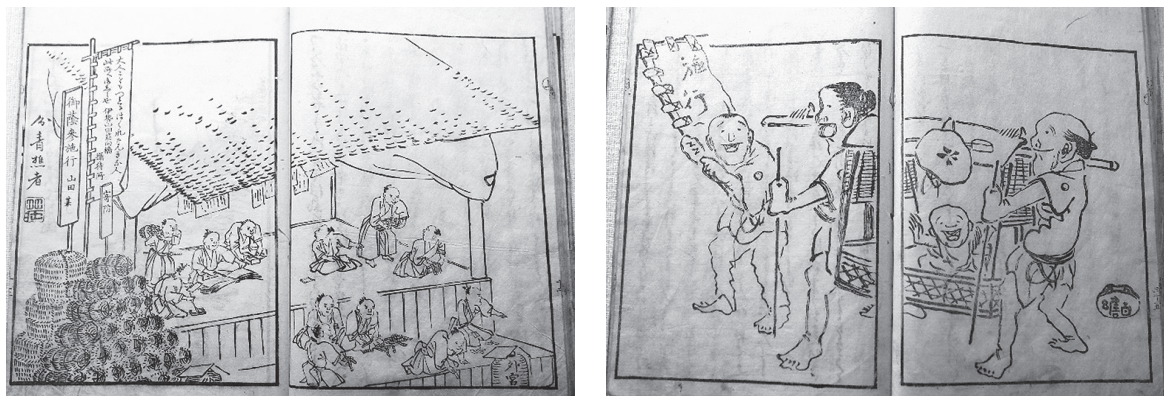
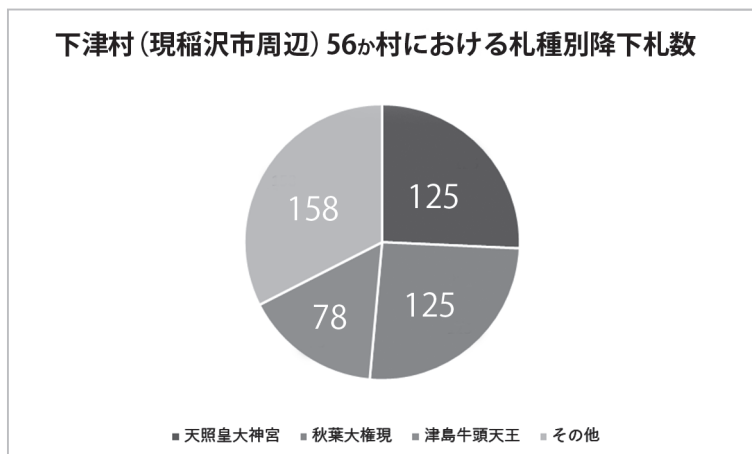


図10、「御蔭参宮文政神異記」、天保3（1832）年、豊橋市二川宿本陣資料館蔵

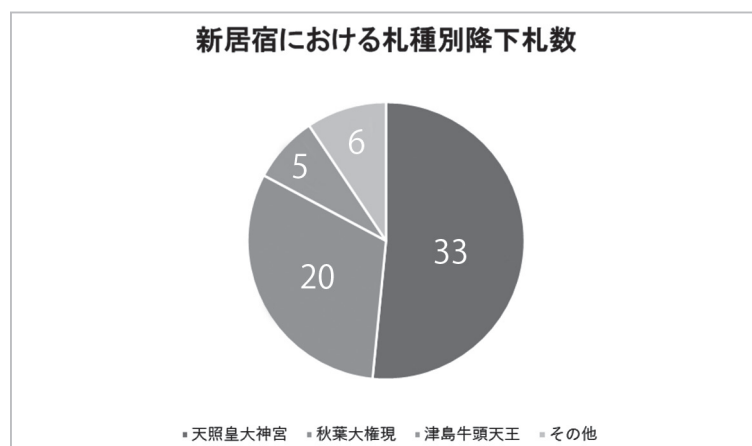
9. 秋葉信仰と「ええじゃないか」

秋葉山は浜松市天竜区春野町にある山である。この秋葉山、すなわち秋葉三尺坊大権現は江戸時代以前から火防の神として知られ、人々の信仰を集めてきた。「ええじゃないか」を「秋葉山おかげ」と伝える史料が存在するほか、「ええじゃないか」の乱舞において、裸踊りや仮装をして秋葉山に参拝に向かったとする記録もある。このようなことから、秋葉信仰は遠江、「ええじゃないか」において重大な影響力を有していたといえる。また、この地域の「ええじゃないか」の様式の地域的特徴の根底にもその影響がうかがえることは、前掲研究の示す通りである。

この地域の「ええじゃないか」には先述の通り秋葉信仰の影響が色濃く見て取れる。図は下津村（現稲沢市周辺）56か村と新居宿に降った札の種類別の数量をグラフにしたものである。前者は（小沢、1985）をもとに、新居宿は『新居町史』をもとに作成した。このように、秋葉山の周辺地域では降ったお札の数量で、伊勢神宮関連のお札を秋葉山関連のお札が上回っている地点がみられる。さらに、ほかの札種でも近郊の津島牛頭天王や多賀大明神などの札が比較的多く見られている。このことから「ええじゃないか」に秋葉信仰の影響がみられるといえる。また、種々のお札が降ることは「ええじゃないか」の特徴の一つでもある。さらに、この秋葉信仰は以後に示す「ええじゃないか」における火の恐怖を用いた脅迫においても大きく影響することとなる。



天照皇大神宮	125
秋葉大権現	125
津島牛頭天王	78
その他	158
合計	486



天照皇大神宮	33
秋葉大権現	20
津島牛頭天王	5
その他	6
合計	64

図11、下津村（現稲沢市周辺）56か村と東海道新居宿における札種別降下札数

10. 「ええじゃないか」における脅迫と民衆の動揺

「ええじゃないか」が東海道筋に東西に拡大したことは前に述べた。では、このような短期間での急速な拡大の要因はなんだったのか。その一つとして考えられるのが、民衆に対してお札を降らす側であった何者かが、脅迫や扇動行為を行っていたということである。具体例を見てみる。

新居宿の大工職人の源吉宅に秋葉大権現のお札、天保通宝とともに次のような文面の書き付けが投げ込まれた。なお、文面は『新居町史』によった。

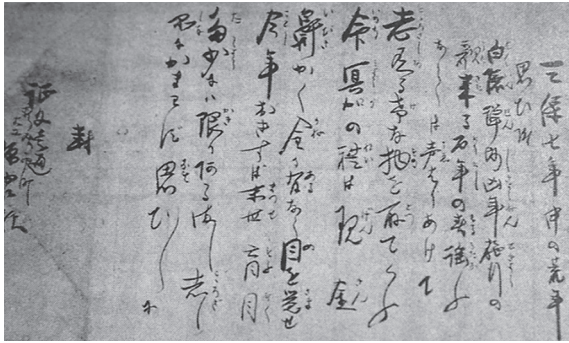


図12、新居宿で投げ込まれた書き付け
慶応3（1867）年、新居関所資料館蔵
（渡辺、2001）より引用

天保七年申の荒年思ひ附

白隠禅師凶年施行の歌、来る酉年の春謡ふならば、声はりあけて

志有る希な物を取てくふ、命冥加の礼は現金、軒かく金か有るなく目を覚ませ、

今年おきすば末世盲目、多少にハ限りあるまし志し、品にかまわず思ひ／＼（思ひ思ひ）に、

天保7（1836）年は天保の飢饉（1833～39）の時期に当たり、「白隠禅師凶年施行の歌」とはこの飢饉に際して僧の白隠が貧しい人々への施しを促したものである。この文面は『新居町史』や渡辺の指摘する通り、天保の飢饉やそれに伴う一揆や打ちこわしを引き合いに出して、「ええじゃないか」騒動への参加を促す内容である。

また、藤川宿では、10月23日朝、当宿東町の年行司役を務めていた桶屋藤十宅に、秋葉大権現の小札と木像が降った。次に示すのは、それらとともに降った手紙の文面である。なお、文面は『岡崎市史』によった。

町内において非分之儀取り斗らい、猶非分の金子取り候に付き、向々え返済致すべし、左なくハ町内焼失に及び、右障故して半作の木象遣し置く者也

「町内焼失」の記述は同時に降った秋葉大権現のお札と結び付けて考えることができる。即ち、火防の神である秋葉大権現の神威を利用して脅迫しているのである。また、岡崎市史の指摘するとおり、「非分の金子」を貧しい人々に施させようとする世直し（世均し）の傾向がみられている（岡崎市史、1992）。

次に『富士宮市史』は、市域での「ええじゃないか」の発生について、三ノ宮禰宜井出刑部藤原幸好の記録（井出文書）を挙げている。文書は慶応3年10月15日に駿河国富士郡大宮町神田丁紺屋利兵衛宅にて起こった怪事件について述べている。

内容を要約すると、利兵衛の娘いくは夫である留蔵が伊豆に商売に出かけたおり、子供二人が天然痘にかかって重篤だったため看病していた。そこへ留蔵のところに案内せよと（ある人物に）言

われ、子供の病気を理由に断ると、手を出すように言われ差し出すと、紙切れを握らされた。その人物は続けてひたいを揺り起こすので見ると、それは瓔珞をかむった美しい女だった。(ここで目覚める) 気が付くと自分の手の中には実際に紙切れ(図13)が握られていて、そこにはあえて判読しにくい文字で「神のをしへ、ほとこししろ、天火こわい」と書いてあった。これをきっかけにいくは浅間神社や三ノ宮に参詣し、さらに近所の人々や名主にも報告した。こうして騒ぎが大きくなり、集団での参詣(とくに富士浅間神社への参詣)に発展したという。これについても、「天火こわい」の記述から、やはり火への恐怖をおおるものであった。

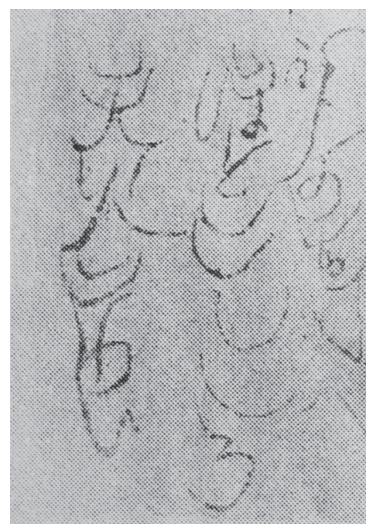


図13、『掛川市史』より引用

ただ、市史は「この内容はどちらかと言えば抽象的で、10月15日から20日間もつづいた村々の動向については、いま一つ明らかではないところがあった。」(『富士宮市史』)と、消極的な見解を述べている。

後に示した2つの史料に共通して言えるのは、火の恐怖を利用して、人々に行動を促していることである。これは、脅迫行為とも捉えることができ、神威を利用して民衆を扇動しようという明確な意図を持ったものである。また、脅迫に「火」を持ち出すのは、この地域での「お札降り」に秋葉信仰が大きく影響していることと何らかの関係性もうかがえる。

少なくともこの地域でお札を降らした個人、あるいは集団によるものと考えるのが妥当である。

このような、民衆に神罰の恐怖を植え付けるような工作は各地で行われ、「ええじゃないか」拡大の一要因となったと考えられる。ただ、こういった脅迫行為なしでも、牟呂村での最初の「お札降り」の際の子どもや女性の死による「神威」の発現のように、民衆の心理には常に神からの恩恵に対する期待と、罰に対する恐怖という二つの側面の感情が内包されていたと考えられる。そうして、こういった心理が民衆を「ええじゃないか」という奇怪な狂乱へと導いていった要因の一つと考えられる。

11. 新たな視点—アルコールと「ええじゃないか」

「ええじゃないか」は従来の「おかげ参り」の狂乱と異なり、民衆は神威をもって体制に反発し封建制や混乱していた社会からの一次的な解放を味わった。このほか、民衆が「世直り(世均し)」を望んだことや、先述のような豊年の予測に民衆が歓喜したことなど、「ええじゃないか」特有の無秩序な狂乱に対する説明はいろいろとなされてきた。無論、このような説も多くの根拠があり合理的に考えて正しいといえるのではないか。ただ、本当にこれだけなのだろうか。もっと直接的に民衆を踊らせ、集団での狂乱に導く具体的な何かがあったのではないだろうか。ここで、酒、すなわちアルコールによる影響が考えられるのである。

牟呂での「お札降り」をはじめ、記録に残っている「お札降り」には必ずそれを祀り祝福する神事や祭礼が伴っている。これは、前にみるように降ったお札を祀らなければ神罰が下ると考えられていたこともあるが、現在の人々にもある神に対する無性な尊敬があったと思われる。そこでは、これまた必ず御神酒が登場する。御神酒とは神に捧げる酒のことで、地域によって様々ではあるが、米から作る日本酒が多いようである。牟呂八幡宮の関係者の方によると、牟呂八幡宮では以前は近くにあった酒蔵で作られたものを利用して、米とこの土地の地下水で作った白濁した濁酒

のような酒であったという。日本酒はアルコール度数が14～15度とビールなどと比べると高い。周知の通り酒に含まれるアルコール分は人に快楽をもたらすだけでなく、飲みすぎると本人でも記憶のないほど泥酔してしまう。日頃抑えていた不満、鬱憤がつい口から漏れたり、いつもの様子では想像もつかないありえない行動に人を駆り立てたりするものである。このアルコールの作用が「ええじゃないか」において狂乱した人々に大きく作用していると考えるのは妥当だろう。

12. まとめ

人々は権力の衰退しつつあった幕府を見、そして「お札降り」によって神の後ろ盾を得たように積極的に封建社会の規律を解除して、「ええじゃないか」に熱狂していった。こうしたことから、かなり奇抜な考えであるかもしれないが、ロジェ・カイヨワが『戦争論』の中で言うように、戦争と祭りとは多くの類似点を持つが、この「ええじゃないか」の狂乱はその中間的な、即ち、一貫して暴力的な戦争と、単なる信仰心や神仏にたいする感謝から起こる祭との間に位置づけられるのではないか。

「ええじゃないか」が、民衆の中に無意識であっても存在した幕末の不安定な世の中に対する不満や不安を表出させたことは確かである。だが、民衆には依然「神威」の存在が大きく、その「神威」を巧みに操ることで民衆をさらなる混乱へと扇動した者の存在が明確化された。また、「ええじゃないか」の拡大にはそうした従来の伊勢、秋葉信仰とそれに付随して形成された東海道や「伊勢参り」を支援する仕組みが関与していた。

総じてみれば、慶応3年7月14日に始まりをみる「ええじゃないか」は東海道を通じた交通、情報網と、広く拡大していた伊勢、秋葉山の信仰の大きく2つの基礎的な要因に加えて、幕末の異常な経済情勢など特殊な要因が合わさることで、爆発的な拡大と人々の熱狂を生んだと結論づけられる。人々を「ええじゃないか」に巻き込み、「ええじゃないか」を「ええじゃないか」たらしめたのは、慶応3年という政治も経済も混乱した時代にあって、依然民衆自身の心の中にあつた「おかげ参り」の伝統と神仏に対する農耕民族特有の篤い信仰心であつた。

参考文献

- ・愛知県史編さん委員会、2019、『愛知県史 通史編5 近世2』、愛知県。
- ・安城市史編さん委員会、1982、『安城市史〈復刻〉』、愛知県安城市役所。
- ・新居町史編さん委員会、1989、『新居町史 第一巻 通史編上』、新居町。
- ・伊豆の国市観光・文化部文化振興課、2014、『大仁町史 通史編一 原始・古代・中世・近世』、伊豆の国市。
- ・伊藤英一、1987、『新版 愛知民衆運動の歴史』。
- ・宇野幸男、1959、『刈谷藩に関する研究』。
- ・枝村三郎、2001、「百姓一揆からええじゃないか騒動 ―江戸後期の変動期における志太・益津地域―」、『焼津市研究』、第2号、67-80。
- ・岡崎市美術博物館、2017、『三河の秋葉信仰』、岡崎市美術博物館。
- ・小沢達司、1985、「稲沢にお札が降って「ええじゃないか」騒ぎ」、『東海近代史研究』、第7号、19-24。
- ・掛川市史編纂委員会、1984、『掛川市史 中巻』、掛川市。
- ・加藤善夫、1981、「静岡県東部における「ええじゃないか」 ―慶応三年の「お札降り」騒動―」、

- 『静岡県近代史研究』、第5号、92-101。
- ・ 神谷力・小嶋正、1994、『図説 豊田・加茂の歴史〈上巻〉』、郷土出版社。
 - ・ 刈谷市史編さん編集委員会、1994、『刈谷市史 第二巻 本文（近世）』、刈谷市。
 - ・ 木村直樹、1987、「住吉踊と「ええじゃないか」』、『行動と文化』、第13号。
（のち再録。同氏、1999、『行動と文化』、第22号、44-46。）
 - ・ 木村直樹、1999、「住吉踊と「ええじゃないか」（続）」、『行動と文化』、第22号、1-46。
 - ・ 江南市史編さん委員会、2001、『江南市史 本文編』、愛知県江南市。
 - ・ 国立歴史民俗博物館、2004、『明治維新と平田国学』、国立歴史民俗博物館。
 - ・ 坂部哲之、1996、「伊勢参宮と東海道」、『東海道交通史の研究』、静岡県地域史研究会編、清文堂出版。
 - ・ 静岡県、1997、『静岡県史 通史編4 近世二』、静岡県。
 - ・ 嶋竹秋・古橋一男、2010、「ええじゃないかの騒動」、『湖西の文化』、第38号、1-29。
 - ・ 清水市、1964、『清水市史 中巻』、清水市。
 - ・ 新修稲沢市史編纂委員会、1987、『新修稲沢市史 資料編十二 近世 地方三』、稲沢市。
 - ・ 新修稲沢市史編纂委員会、1990、『新修稲沢市史 本文編 上』、稲沢市。
 - ・ 新編岡崎市史編集委員会、1992、『新編 岡崎市史 近世3』、岡崎市。
 - ・ 杉崎章・河合克己、1995、『図説 知多半島の歴史〈下巻〉』、郷土出版社。
 - ・ 高木俊輔、1979、『教育社歴史新書〈日本史〉93 ええじゃないか』、教育社。
 - ・ 谷山正道、2015、「近世後期の民衆運動」、『岩波講座 日本歴史 第14巻 近世5』、大津透ら編、岩波書店、253-286。
 - ・ 田村貞雄、1985、「「ええじゃないか」の発端と御鋤百年祭」、『東海近代史研究』、第7号、2-18。
 - ・ 田村貞雄、1987、『ええじゃないか始まる』、青木書店。
 - ・ 土屋喬雄、1931、「維新史上のナンセンス」、『中央公論』、1931年12月号。
（のち同氏、1937、「維新史上のナンセンス」、『日本社会経済史の諸問題』、南郊社、315-333による）
 - ・ 天竜市、1981、『天竜市史 上巻』、天竜市役所。
 - ・ 所三男・刈谷市教育委員会、1987、『刈谷町庄屋留帳 第十八巻』、刈谷市。
 - ・ 豊田市史編さん委員会、1981、『豊田市史 二巻 近世』、豊田市。
 - ・ 豊橋市史編集委員会、1975、『豊橋市史 第二巻』、豊橋市。
 - ・ 豊橋市美術博物館、2003、『おかげまいりとええじゃないか』、豊橋市美術博物館。
 - ・ 名古屋市博物館、2006、『ええじゃないかの不思議—信仰と娯楽のあいだ』、名古屋市博物館。
 - ・ 西垣晴次、1973、『ええじゃないか—民衆運動の系譜』、新人物往来社。
 - ・ 西垣晴次、2004、「「ええじゃないか」の背景・幕末の狂乱」、『週刊朝日百科86 日本の歴史 近世から近代へ—6 世直しとええじゃないか』、第622号、9-178-9-181。
 - ・ 沼津市史編さん委員会、2006、『沼津市史 通史編 近世』、沼津市。
 - ・ 榛原町史編纂委員会、1988、『静岡県榛原町史 中巻』、榛原市。
 - ・ 秦達之、1985、「尾張地方における「ええじゃないか」」、『東海近代史研究』、第7号、25-49。
 - ・ 浜北市、1989、『浜北市史 通史上巻』、浜北市。
 - ・ 原秀三郎・湯之上隆、1996、「総説I 秋葉信仰の成立と展開」、『静岡県歴史の道 秋葉街道』、静岡県教育委員会文化課編、静岡県教育委員会文化課、2-17。
 - ・ 半田市誌編さん委員会、1989、『新修 半田市誌 本文篇上巻』、愛知県半田市。

- ・樋口雄彦・沼津市明治資料館、2018、『御一新!? ～庶民が体験した沼津の幕末維新～』、沼津市明治資料館。
- ・尾西市史編さん委員会、1998、『尾西市史 通史編 上巻』、尾西市役所。
- ・福岡猛志、1991、『知多の歴史 シリーズ愛知 2』、松籟社。
- ・藤枝市史編さん委員会、2011、『藤枝市史 通史編下 近世・近現代』、藤枝市。
- ・富士川町史編纂委員会、1962、『富士川町史』、静岡県富士川町。
- ・藤谷俊雄、1968、『「おかげまいり」と「ええじゃないか」』、岩波新書。
- ・富士宮市史編纂委員会、1986、『富士宮市史（下巻）』、富士宮市。
- ・碧南市史編纂委員会、1970、『碧南市史 第二巻』、碧南市。
- ・水谷盛光、1982、『ええじゃないか 名古屋330年の歴史』、中日新聞本社。
- ・水谷盛光、「「ええじゃないか」騒動発祥地考説」、『郷土文化』、第37巻第3号、23-31。
- ・武藤真、2018、「名古屋の「ええじゃないか」」、羽賀祥二・名古屋市蓬左文庫、『名古屋と明治維新』、風媒社。
- ・村瀬正章、1988、『刈谷町庄屋留帳 解説 一第十一巻より第二十巻まで一』、刈谷市教育委員会。
- ・矢野芳子、1981、「「おかげまいり」と「ええじゃないか」」、『一揆 4 生活・文化・思想』、青木美智男ら編、東京大学出版会、317-357。
- ・竜洋町史編さん委員会、2009、『竜洋町史 通史編』、磐田市。
- ・渡辺和敏、1996、「総説Ⅱ 近世の秋葉信仰と秋葉道」、『静岡県歴史の道 秋葉街道』、静岡県教育委員会文化課編、静岡県教育委員会文化課、18-31。
- ・渡辺和敏、2000、『東海道の宿場と交通』、静岡新聞社。
- ・渡辺和敏、2001、『愛知大学総合郷土研究所ブックレット1 ええじゃないか』、あるむ。
- ・公益財団法人アルコール健康医学会、お酒と健康飲酒の基礎知識
<http://www.arukenkyo.or.jp/health/base/index.html>

磐城平城「中門櫓」外観の推定

福島県立磐城高等学校2年 ^にった ^{ゆう}き
新田 悠樹

序論

1. はじめに

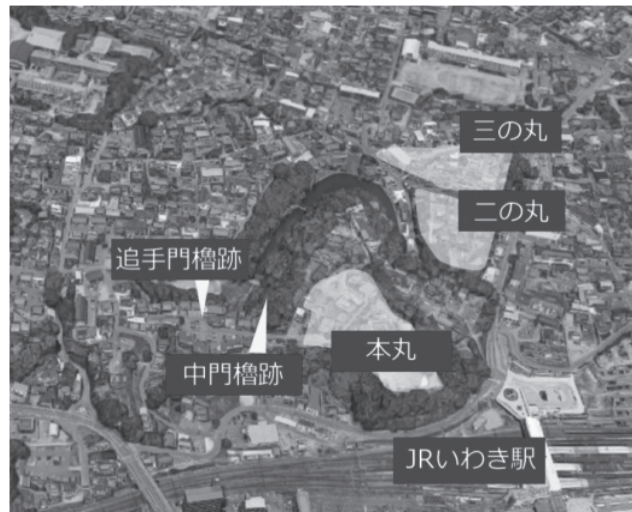
磐城平城は福島県いわき市に位置する近世城郭である。丘の上に立地する平山城と呼ばれる形態であり、1615年に完成した。築城主は鳥居忠政である。忠政は、父・鳥居元忠が伏見城の戦いで討死し、その功績により磐城に入封された。以降「磐城平藩」の藩庁がおかれ、鳥居→内藤→井上→安藤の順に各氏（いずれも譜代）が磐城平藩主・磐城平城城主を務めた。1868年に起きた戊辰戦争・磐城の戦いにより多くの櫓群が焼失し、現在、城跡は宅地化してしまったがこの城の本丸正門「中門櫓」の石垣の一部が数少ない遺構として現存している。本稿では焼失前の中門櫓がどんな姿をしていたのか推定を行った。

図① 磐城平城の概要

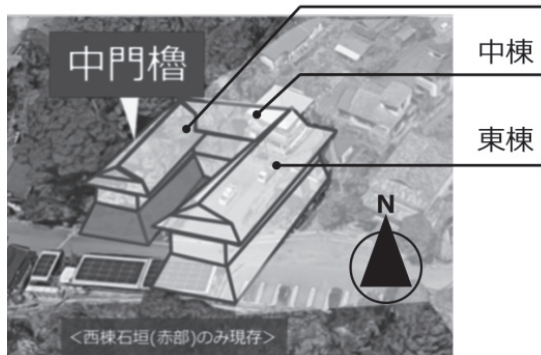
所在 | 福島県いわき市字旧城跡



現在の磐城平城跡 鳥瞰図



図② 中門櫓の概要



(いずれの図も筆者作成)

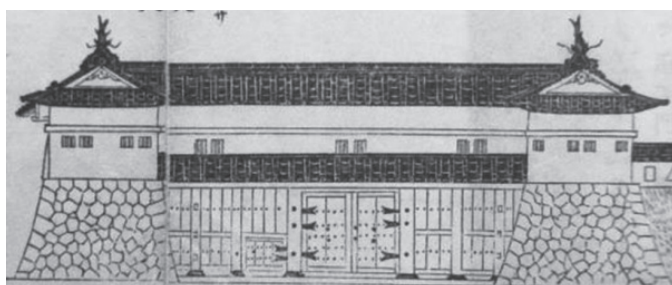
2. 事前調査 『戊辰当年現在拾櫓ノ内六櫓ノ圖』及び西棟石垣について

事前に行った中門櫓の調査では、以下の史料を確認できた。

名称	概要	成立	作者
戊辰当年現在拾櫓ノ内六櫓ノ圖	絵図	1901	味岡禮質
磐城平城内郭殿中図	地図	1810	不明
平城ハツ棟櫓と中門	掛け軸	不明	不明

古写真や図面等を確認することはできなかったものの、外観が鮮明に描かれている絵図『戊辰当年現在拾櫓ノ内六櫓ノ圖』を確認できた。

図③ 戊辰当年現在拾櫓ノ内六櫓ノ圖

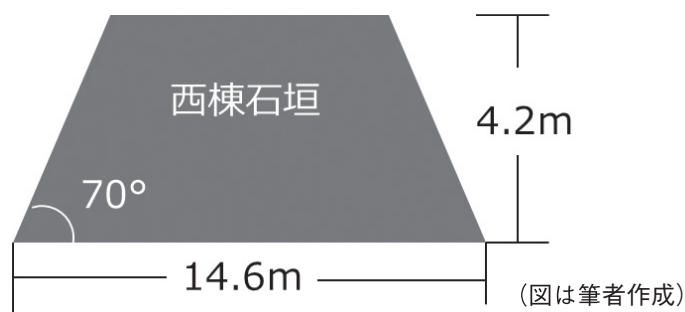
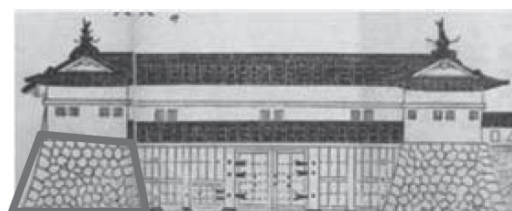


味岡禮質（1901）『戊辰私記』より

この史料について詳しく調べると、中門櫓焼失後に描かれたものであることが分かった。つまり、作者は現物の中門櫓を見ながら描いていないため、作者の記憶に基づいている史料であると考えられるのである。よって、この絵図には実物との相違点が存在する可能性が高い。中門櫓の外観を正確に推定するためには、本絵図がどの程度まで信頼できる史料なのか検証を行う必要があるだろう。

また、事前調査の一環として現存している西棟の石垣の実測調査を行った。結果は高さが4.2m、底部の長さが14.6m、角度が70°であった。

図④ 実測調査の結果



なお、最も保存状態が良好であるのは石垣の南東部であるが、それ以外の部分については東日本大震災の影響で一部が崩落しており現在この石垣の上部は立ち入り禁止となっている。

図⑤ 中門櫓西棟石垣 東からの写真
(筆者撮影)



本論

1. 外観推定の方法

調査で確認した史料のなかで最も外観が鮮明に描かれていた『戊辰當年現在拾櫓ノ内六櫓ノ圖』の内容を参考にして外観推定を行うが、前述のとおり本史料の信憑性には疑問が残る。そこで、絵図の内容と現存している西棟石垣の実測調査の結果を照合し

①絵図に実物との相違点はあるのか

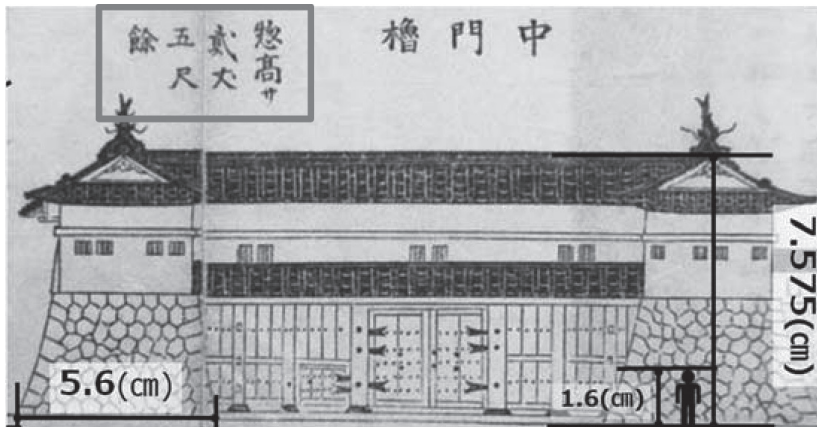
②相違点がある場合、実際の姿はどのようなものだったのか

の2点を考え、外観を推定することを試みた。以下、「絵図の誤りを洗い出す」・「柱間の検証」・「窓配置の検証」・「桁行の検証」・「棟高の検証」の項目にわけ、検証を行った。また、結論では研究結果を踏まえて三次元CGを用いた外観推定図を製作した。

2. 絵図の相違点を洗い出す

この絵図において実物との相違点だと考えられる内容を洗い出すために、以下の操作を行った。まず、絵図に記述されている値「惣高サ貳丈五尺」すなわち7.5757m（1丈=3.03m 1尺=0.303cmで計算）に着目し、絵図上での中門櫓の高さ（ここでは門柱底部から棟までの高さを指し、以下「棟高」とする。）が7.575cmとなるように比率を変えずに大きさのみを変更した。

図⑥ 絵図に行う操作



(絵図に筆者が加筆)

すなわち、7.575 (m) →7.575 (cm) とした絵図を作成したということである。実測調査の結果から、西棟石垣底部の幅についても14.6 (m) →14.6 (cm) となれば、この絵図の記述の値や縦横の比率が正しいといえる。

しかし、絵図の西棟石垣底部の幅を定規で計測すると、5.6cmであった。棟高を実際の1/100に合わせたにも関わらず西棟底部は1/100とならないのだから、この絵図には縦横の比率か棟高の記述のいずれかに誤りがあることが分かる。以下、この2点について検証を進める。

3. 棟高の検証方法

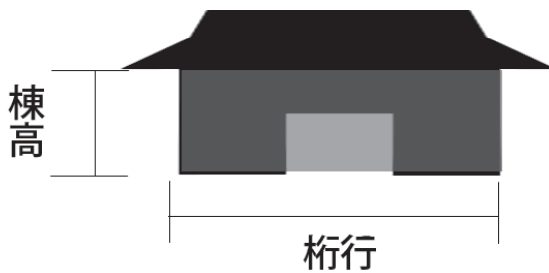
棟高の手掛かりとなる史料や遺構は確認できなかったため、他の城郭との類推による検証を試みた。他の城郭と比較して門の大きさが不自然に大きい、または小さいということがなければ、記述の値は信頼できるということが分かる。本稿では、城門の「大きさ」を示す値として「棟高×桁行」の値を使用した。桁行とは城門の幅を示す値である。

図⑦ 棟高について



例えば上図のような二つの城門があったときに棟高だけで比較すると、両者の大きさの違いを考慮することができない。

図⑧ 「大きさ」について



「棟高×桁行」は、上図のような四角形の面積と等しい。これにより、城門の大きさを正確に判断することができる。棟高・桁行の両面から城門の大きさを判断するこの方法で類推を行うためには、まず、中門櫓の桁行を推定する必要がある。

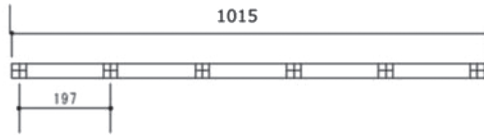
(i) 西棟の桁行の検証

石垣が現存しているため他の棟より推定が容易である西棟について、柱の中心とその隣の柱の中心までの距離を「柱間」として、その柱間の数を検証する。柱間1つ分の寸法は福島県白河市の近世城郭「白河小峰城」との類推により、一辺が30cmの柱が197cmの間隔で並んでいると推定した。なお、白河小峰城は磐城平城と地理的に近く、かつ磐城平城と同条件である譜代大名の平山城であるため類推の対象として適当であると判断した。また、西棟全体の桁行は、石垣上部が立ち入り禁止であるため以下の方法で検証を行った。

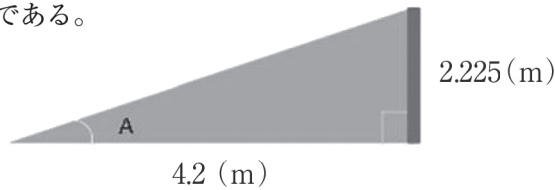
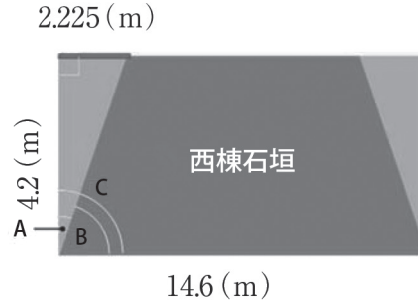
中門櫓西棟石垣の勾配に反りはないため、石垣の形を底部の長さ14.6m、高さ4.2mの台形と単純化して考える。このとき、石垣上部の長さが分かれば石垣の角度を求めることができる。柱間がいくつであるときに石垣の角度が実測調査の結果である70°に最も近づくか計算した結果、その値は柱間6間であった。よって西棟の桁行は6間であると推定できる。

図⑨ 計算方法

[i] 上部が5間するとき
上部の長さは10.15m。



底部の長さとの差は
 $14.6 - 10.15 = 4.45$ (m)
 また、
 $4.45 \div 2 = 2.225$
 であるから、右図の石垣における直角三角形の辺の長さは
 2.225 (m)である。

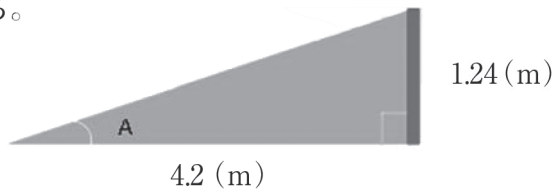
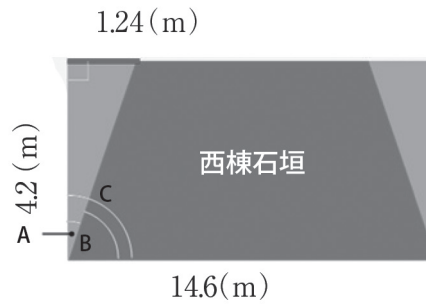


角Aの大きさを整数値で求めると、
 $\tan A \approx 0.53$
 Aの角度は約 28° である。したがって、上図の角Bの大きさは
 $90 - 28 = 62^\circ$

[ii] 6間するとき
上部の長さは12.12m。



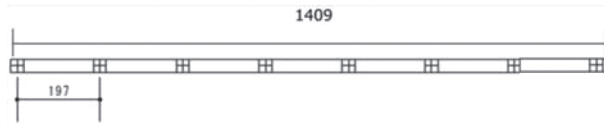
底部の長さとの差は
 $14.6 - 12.12 = 2.48$ (m)
 また、
 $2.48 \div 2 = 1.24$
 であるから、右図の石垣における直角三角形の辺の長さは
 1.24 (m)である。



角Aの大きさを整数値で求めると
 $\tan A \approx 0.3$
 であるため、
 Aの角度は約 17° である。したがって、上図の角Bの大きさは
 $90 - 17 = 73^\circ$

[iii] 7間するとき

上部の長さは14.09m。

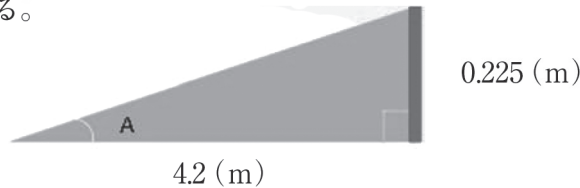
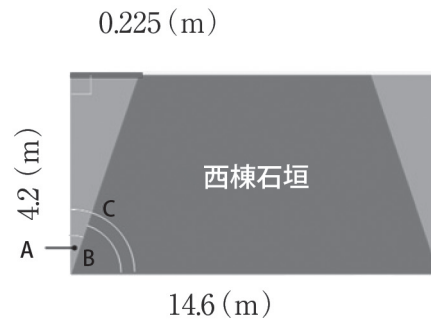


底部の長さとの差は
 $14.6 - 14.09 = 0.51$ (m)

また、

$$0.51 \div 2 = 0.255$$

であるから、右図の石垣における直角三角形の辺の長さは
 0.255 (m)である。



角Aの大きさを整数値で求めると

$$\text{Tan} A \approx 0.06$$

であるため、

Aの角度は約 3° である。したがって、上図の角Bの大きさは
 $90 - 3 = 87^\circ$

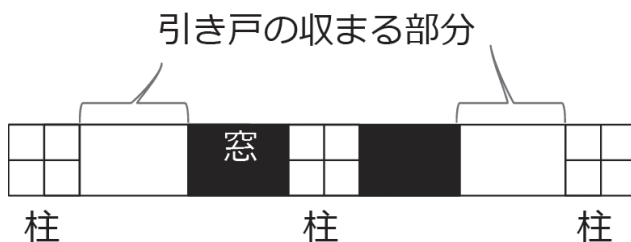
(ii) 柱間の裏付け

前述のように白河小峰城の実測調査から柱間の間隔を197cmとして検証を行ったが、これは「京間」という畳の寸法の値である。畳は室町時代以降に規格が生まれはじめ、主に「江戸間」・「京間」・「中京間」の3種類が存在する。「京間」は慶長13 (1608)年が語の初出であり、それ以前には京間が形成されていたと考えられる。その後、慶安 (1648~1652)年間に江戸間が公式に使用された。磐城平城は元和元 (1615)年に完成しているため、中門櫓は江戸間が形成される以前に建立されたことが分かる。また、完成後から戊辰戦争で焼失するまでの間に中門櫓の大規模な建て直しが行われたという記録は現在のところ確認できていない。

以上から、中門櫓の柱間の間隔は197cmすなわち京間の寸法であったと裏付けることができた。

(iii) 窓の配置について

窓は図のように、柱と柱の間に挟まれるように設置される。



柱間が6間のために検証している絵図のような窓の配置が可能であるか検証を行った。

図⑩ 西棟 窓配置の検証



中央に窓のない柱間があり、両端に窓が2つずつ配置されているという、絵図と同じような窓の配置が可能であったため西棟の窓の配置は不自然でない結論付けた。

(iv) 窓の配置の裏付け

柱の配置から窓の配置を検証する手法について、その有効性を確認するために図面と古写真の両方を入手できた名古屋城大天守を例として実証を行った。

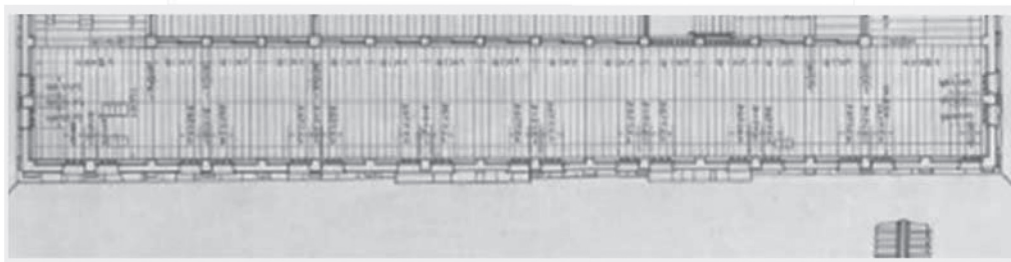
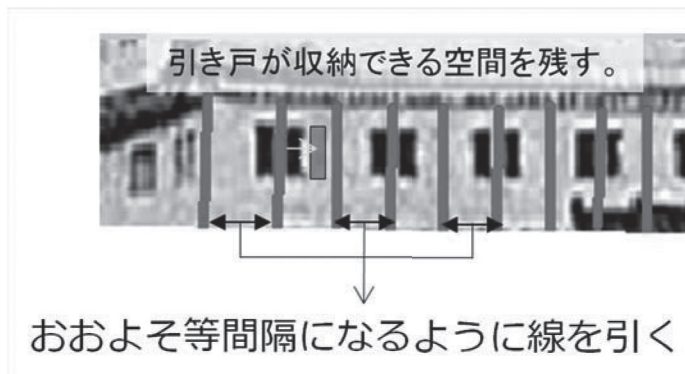
図⑪ 名古屋城大天守



グレーの線が外観から推定できる柱の位置。
下図がそこから推定できる柱の配置。白四角が柱を、黒四角が窓を表す。



配置の方法



この結果は、「昭和実測図」と一致する。当手法がある程度有効であることが分かった。

図⑫ 絵図 窓配置の歪み



(グレー線は筆者加筆)

しかし、中門櫓西棟の窓の描写において同様のことを行おうとすると、左図のように引き戸の収まるスペースがなくなってしまうため、窓を開閉することができない状態となってしまうことが分かる。柱間が6間で窓の数が4つであることは推定できるが、この絵図では歪んでそれが描かれていることがわかった。本史料は「図面」でなく「絵図」であり、窓の個数までは信頼できるが、その配置のバランスまでは正確でないと考えられる。

(v) 東棟の桁行の検証

西棟の窓の数は不自然でないことが分かった。よってこの絵図の窓の数の描写には信頼性があると考えられる。そこで、東棟についてその柱の配置を推定することを試みた。

図⑬ 絵図 窓配置の歪み



- ①窓が中央に2つ 両端に1つずつ
- ②西棟とは異なる窓の配置→6間ではない可能性が高い



(柱間の図は筆者作成)

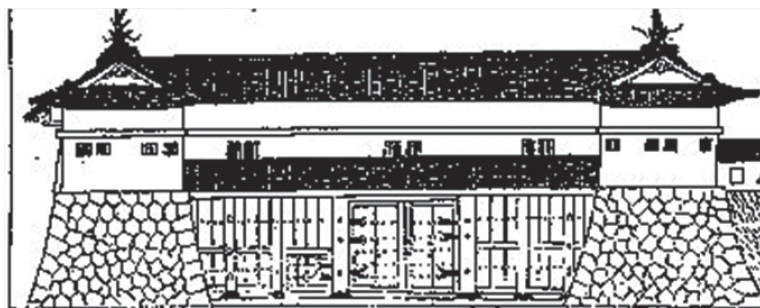
その結果、東棟は4間であると推測できた。

(vi) 中棟の桁行の検証

西棟・東棟に続き、中棟の桁行も推定する。全体の桁行から、推定ができていない西棟・東棟の桁行を差し引いて推定を行った。

中門櫓全体の桁行は、幕府の直轄の城である江戸城・大坂城の赤坂門・大手門のより大きくなることはないと考えられるため、江戸城赤坂門の桁行約45m・大坂城大手門の桁行約39m以下であると考えられる。西棟・東棟の桁行はそれぞれ12.12m、8.18mであるから、 $39 - 12.12 - 8.18 = 18.7$ より、中棟の柱間は最大でも9間であると考えられる。一方、中棟の最小値について、柱間が5間以下であると絵図に描かれている数と同じ、6つの窓を開けられなくなることが分かった。

図⑭ 5間のときの窓の数

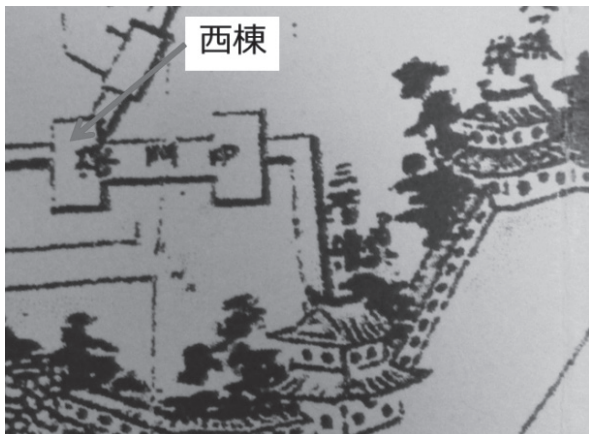


5間のとき、最大でも窓は5つ



よって、中棟の柱間は6間以上であることが分かる。さらに、複数の絵図や地図で西棟よりも中棟の方が、桁行が長く描かれているため、中棟の桁行は西棟の桁行である6間よりは大きいと考えた。

図⑮ 西棟よりも中棟が長く描かれている絵図



磐城平城内外一覽図 (1622)



磐城平城ハツ棟櫓と中門

以上から中棟の柱間は7,8,9間のいずれかということになる。

イメージ図 9間



中棟が9間のとき、中棟の幅は18.03mである。このとき、全体の幅は $18.03+12.12+8.18=38.33$ (m)。

イメージ図 8間



中棟が8間のとき中棟の幅は16.06mである。このとき、全体の幅は $16.06+12.12+8.18=36.36$ (m)

イメージ図 7間



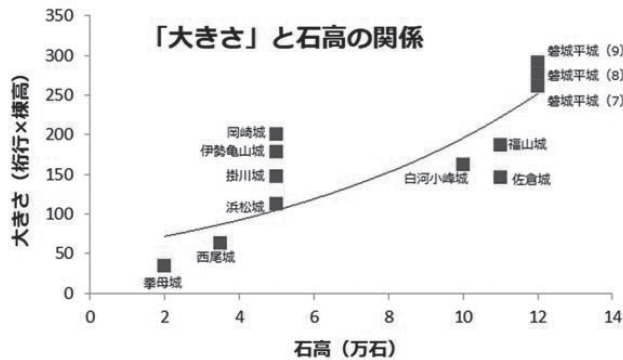
中棟が7間のとき中棟の幅は14.09mである。このとき、全体の幅は $14.09+12.12+8.18=34.39$ (m) なお、左右対称の窓の配置ができ、門扉と窓が重なるような窓の配置により近いのは8間のときである。以上から中門全体の桁行を推定することができた。これにより「桁行×棟高」の値を得ることができ、他の城門との比較・類推が可能となる。

4. 他の城との類推による高さの検証

「惣高サ2丈7尺 (=7.575m)」という記述が絵図の上部にあり、この値が不自然な値であるか、他の城郭との比較により検証する。ここでは門の大きさを(桁行×高さ)の値、すなわち門の立面図の面積と定義した。また、調査の対象は磐城平城と同条件である譜代大名の平山城とした。下の表の城郭を調査した。

データの回答	福山城・小峰城・掛川城・浜松城・拳母城・西尾城・岡崎城・伊勢亀山城・佐倉城
不明の回答	上山城・犬山城・小田原城・丸岡城・郡山城・延岡城・沼津城・福知山城・唐津城・岩槻城 鳥羽城・大多喜城・丹波亀山城・飯山城・篠山城・川越城・沼田城・杵築城・佐野城
未調査	高遠城・大野城・佐貴城・村上城・安中城・結城城・多古城

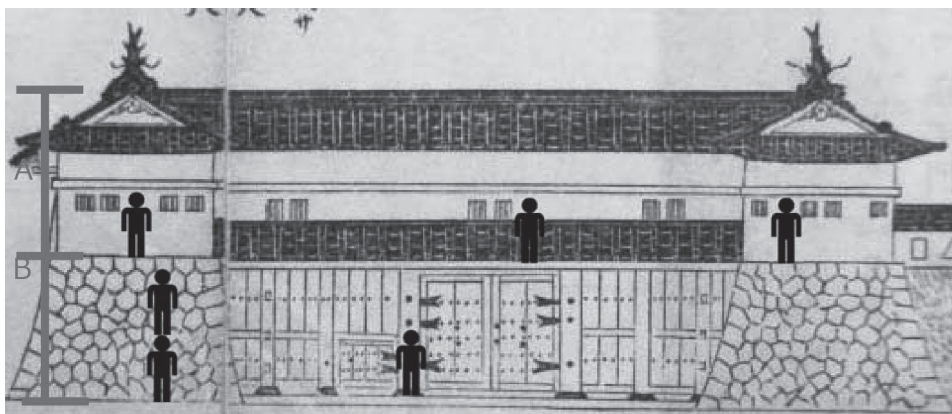
結果を下のグラフに示した。磐城平城の点は近似曲線上の近くにあるため、記述の値は不自然でないと考えることができた。グラフ内に示されている磐城平城のとなりには書かれている括弧内の数は中棟の柱間の数を示している。中棟の長さが7間であった場合の点が最も近似曲線に近づくため、中棟の長さは7間であった可能性が8・9間であった可能性よりも高いと考えることができる。



5. 縦横比の検証 結論・石垣と櫓の高さの比率について

以上から絵図の記述の値は信頼できることが分かった一方、絵図の縦横比は誤りであることが分かった。

実際に、写真上の高さが7.575cm（実際の1/100）となるように大きさを修正した中門櫓の絵図を作成し、江戸時代の男性の平均身長である160cm（写真上では1.6cm）の人間と重ね合わせると、西棟石垣の高さが二人分の高さ、つまり約3.2mとなる。これは実測調査の結果と矛盾する。このことから縦と横の比率が誤りであることが確認できる。それに加え、櫓の高さと石垣の高さ（A：B）の比率は正確でないことも分かる。



結論

1. CGの作成

ここまでの検証の結果をまとめると、

絵図について

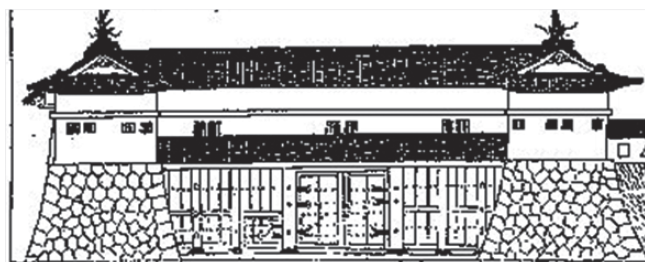
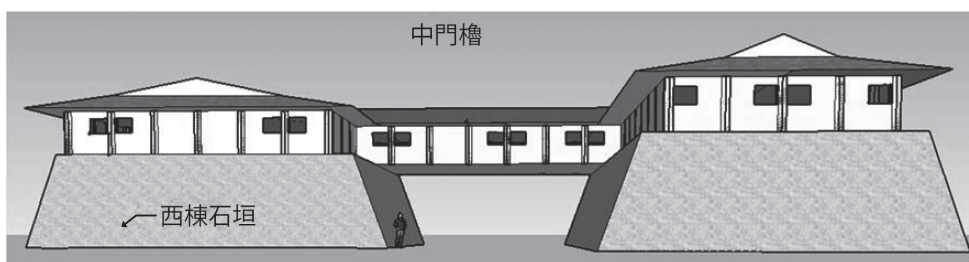
- ・記述の値→不自然でない
- ・窓の配置→窓の数は不自然でないものの、配置のバランスは不自然
- ・縦と横の比率→不自然
- ・石垣と櫓の高さの比率→不自然

中門櫓の外観について

棟高…7.575mと推定できる（絵図の記述の値は不自然でない）。

桁行…西棟は6間、東棟は4間、中棟は7・8・9間のいずれか（7間である可能性が高い）

以上の結果を基に、三次元CGを製作した。なお、3次元CG製作に使用したソフトは「sketchup make 2017」である。



絵図と比較すると全体的に横長であるほか、中棟の幅が狭く見えることが分かった。また、CG中の西棟石垣付近に描かれているのは身長160cmの人である。

<三次元CGについて>

- ・柱間を特定できたことを示すために柱が見える構造としているが、実際には柱は見えなかったと思われる。
- ・窓の数および配置は正確であるものの、窓の高さや大きさは確証を得られていない（白河小峰城を参考としている）。
- ・棟高は正確であるものの、軒の長さや屋根の角度は確証を得られていない。
- ・鯨や瓦及び門扉は参考とできるものがなかったため、省略してある。

2. まとめ

『戊辰當年現在拾櫓ノ内六櫓ノ圖』には縦と横、石垣と櫓の高さなどの、比率に関して実際との相違点があることが分かった。これは作者が、中門櫓が焼失した後に実物を見ないで描いたというこの史料の性格を踏まえれば自然なことであるといえる。また、作者は中門櫓を見上げる状態で見ていることも比率にずれが生じてしまう一因だと考えられる。

三次元CGを製作することはできたものの確証を得られていない部分はまだ多い。今後、史料や遺物の再調査を行うなど、さらに詳細に中門櫓の外観推定を行いたい。

<参考文献>

- 味岡禮質編（1901）『戊辰私記』。
- いわき市教育文化事業団編（2011）『みんなで学ぼう いわきの歴史』いわき市教育委員会。
- いわき市史編さん委員会編（1972）『いわき市史 第9巻』。
- いわき市史編さん委員会編（1975）『いわき市史 第2巻』。
- 磐城平城内郭殿中図（1810）。
- 岩城平城内外一覽図（1622）。
- いわき地域学会（1996）『磐城平城絵図等調査報告』。
- 岩槻市（1980）『岩槻市史 近世史料編藩政史料（下）』。
- 尾上孝一（1970）『図解 木造建築の技術』理工学社。
- 小野一雄「磐城平城と城下町の形成」、『月刊いわきKODOMO新聞はまっこ』2011 3/10。
- 草野和夫（1991）『東北民家研究』中央公論美術出版。
- 『国史大辞典 1』（1971）吉川弘文館。
- 『国史大辞典 4』（1984）吉川弘文館。
- 『日本史大事典 2』（1993）平凡社。
- 佐藤孝徳・小野一雄執筆監修 いわき歴史文化研究会編（2006）『磐城平藩と安藤家展』。
- 滋賀県（1957）『重要文化財彦根城天秤櫓・太鼓櫓及続櫓修理工事報告書』。
- 清水淳郎（1995）『復元イラストと古写真で見る 日本の名城』碧水社。
- 白河市（2007）『白河市史』。
- 平町役場（1882）元北目村地籍村図及。
- 中山良昭（2011）『図解 日本の城』西東社。
- 沼津市（2006）『沼津市史 通史編近世』。
- 平本嘉助（1972）「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化」、『人類学雑誌』80（3）
日本人類学会。
- 三浦正幸（2005）『城のつくり方図典』小学館。
- 山形市（2018）『史跡 山形城跡 二の丸東大手門』。

<参考HP>

- 一般社団法人岡崎パブリックサービス『大手門 | 見どころ・施設紹介 | 岡崎公園 | 岡崎おでかけナビ
岡崎市観光協会公式サイト』<<https://okazaki-kanko.jp/okazaki-park/guide/7>>（2019 2/27閲覧）
- 亀山市史編さん歴史合同部会・亀山市・亀山市歴史博物館 ウェブ亀山市史 歴史資料編（2011）
「亀山城築城及び城域の記録」
<http://kameyamarekihaku.jp/sisi/siryoul/kato_akira01/2/2-00-095/kakira0949.html>（2019 2/20閲覧）
- 国土地理院『地理院地図』<<https://maps.gsi.go.jp/>>（2018 9/12閲覧）
- 佐倉市『佐倉城址公園 | Discover | 佐倉市観光紹介サイト SAKURA SEEing』
<<http://sakuraseeing.city.sakura.lg.jp/discover/history01.html>>（2019 2/27閲覧）
- 『史料情報共有化データベース』国文学研究資料館<http://base3.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/SKYSearch.cgi?DEF_XSL=detail&SUM_KIND=MetaSummary&>（2019 9/23閲覧）
- 豊田市郷土資料館七州城大手門鯉
<http://www.toyota-rekihaku.com/bunka/02_kougei/win/07.html>（2019 2/27閲覧）

『大好き！磐城平城』 <<http://iwakitairajo.jp/index.html>> (2018 8/26閲覧)

『天守門 | 浜松城のガイド | 攻城団』 <<https://kojodan.jp/castle/123/memo/864.html>> (2019 2/27閲覧)

名古屋市『昭和実測図 閲覧サービス』 <https://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/20_etsuran/> (2019 9/23閲覧)

西尾市役所『西尾市歴史公園』 <<https://www.city.nishio.aichi.jp/index.cfm/8,2179,92,417,html>> (2019 2/27閲覧)

“白地図ぬりぬり” <<https://n.freemap.jp/st/list.html>> (2019 2/24閲覧)

“福山市及び史跡福山城跡等の概要”
<<https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/uploaded/attachment/110416.pdf>> (2019 2/20閲覧)

LINEトラベルjp『日本初！本格木造復元天守・静岡「掛川城」は東海道の美しき要衝 | 静岡県』
<<https://www.travel.co.jp/guide/article/887/>> (2019 2/27閲覧)

農業全書に現れる江戸時代の農民の労働観

京都市立堀川高等学校 2年 ふじむら さとし 藤村 聡

1. 背景

1.1 世界における工業化による労働観の変化

近代工業社会における労働観、特に労働者の持つべき時間概念、時間規律は、その時の自然環境に左右されず、事前の計画に基づき、決まった時間に出て、決まった時間（多くの場合それは長時間になった）働くというものであった。しかし、多くの国では、近代以前の農民の働き方はその時の季節や天候に合わせて変わるものであった。そのため、仕事に具体的な計画はなく、多くの人々は自然のリズムに合わせて働き、時間を貴重にする思想も未発達であった。よって、急速な工業化（産業革命）による時間概念・規律の変化についていくことができない労働者が多かった。よって、使用者が労働者に時間を有効活用させるように工夫せざるをえなかった（スミス, 1995）²⁾。

1.2 日本の労働観

しかし明治維新以降急速に工業化した日本ではそのような問題は比較的小さかった。

明治期の労働者は時間に高い価値を認めていたため、工場での時間規律にすぐに対応できた。彼らは、労働時間短縮よりも賃金の引き上げ、時間外労働の平等な割り振り、残業手当の支払いに熱心であった。また、彼らの中には、高賃金のために休日を返上し徹夜で働いたものもいた。そしてこれは第二次大戦後もしばらく続いた。例えば、1889年に東京の馬車鉄道労働者が10時間労働を要求した時、彼らは10時間労働に短縮することを要求したのではなく、10時間を超えた時間について超過時間手当を要求していた。また、労働者は、残業手当も集団で分配しており、時間が自分の自由にはならず、時間も仕事の仲間の集団所有になっていた（武田, 2008）³⁾（スミス, 1995）²⁾。

その理由として、日本人は江戸時代から時間を大切に仕事に励む習慣が根付いていたからだと考えられる。調べてみた結果、江戸時代に日本の農家に広く普及していた農書の、農民に対する心構えを説いた部分が近代的な時間概念に近く、それが時間を大切にすまめに働くという習慣につながったと分かった。しかし、なぜ農書に近代的な労働観に近いものがあるのか、またどのようにそれが農民に広まったのか疑問に思った。それを解決する手立てを考えるうちに、日本の農書の原点で、後世に大きな影響を与えた農書である『農業全書』が重要な役割を果たしているのではないかと考えた。

よって本稿では、『農業全書』に近代的な労働概念が反映されているのかどうか、またその労働観の背景やそれが農民に広がる過程について明らかにする。

2. 課題とそれに対する仮説

2.1 課題

『農業全書』に近代的な労働観は現れているのか。もし現れているなら、その背景は何か。また、どのように農書の思想が農民に伝わったのか。

2.2 仮説

①『農業全書』に日本人の労働観が近代的なものであったことを示す文章がある。

- ② ①で見つかった文章の背景・意図が単に君主が年貢を増やすためのものではなく、農民に利益をもたらそうという意図があった。
- ③ 『農業全書』の思想が後世の農書に大きな影響を与えた。
- ④ 農民が農書の思想に基づいた働き方をするようになった。

3. 手法

3.1 仮説を検証するための道筋

- ① 『農業全書』で、江戸時代の労働観に関係のある部分を読み、その中に仮説で予想したような内容と同じような内容があるか確認する。
- ② 『農業全書』がどのような背景で書かれたのか、文章の背景、意図は何か調べる。
- ③ 『農業全書』を後世の人々、特に農書作者が注目し、その労働観を継承していたかどうか調べる。
- ④ 農書が農民に広がる過程や当時の農民の働き方を調べ、農書の教えが多くの人々に広まったか確認する。

3.2 具体的な論証方法

- ① 『農業全書』 「卷之一 農事総論」、「卷之十一 附録」（農民の心得）を読んで探す。
- ② 『農業全書』の前後の文脈から、『農業全書』に近代的労働観が現れている背景を探す。また、『農業全書』がどのようなものかについて触れている資料に触れ、背景、意図を知る。
- ③ 『農書の地理学的研究序説』等を読み、『農業全書』が後世の農書に与えた影響の実例を調べる。
- ④ 『日本社会史における伝統と創造』を読み農書の教えがどのように広まったか、当時の農民はどのように働いていたか調べる

4. 用語の定義と説明

4.1 近代的な労働観の定義

この論文では、近代的な労働観を以下のように定義する。

- ① 時間が貴重で重要なものであると主張
- ② 計画を立てることの重要性を主張
- ③ 長時間働くことを主張 (①, 1日の中での長時間 ②, 年の中での長時間)

この定義の内、①、②は、『日本社会史における伝統と創造』（スミス, C, トマス, 1995）を参考にした。①についてスミス（1995, p.212）は、「E・P・トムソンは、「時間、労働規律と産業資本主義」という論文において、（中略）工場労働者の第一世代の人々はそれぞれの雇い主から時間の大切さを教わったのだ、と結論した。」とトムソンの文章を用い、近代的労働観に時間を貴重なものとみなす態度が必須であると示している²⁾。また、②についてスミス（1995, p.215）は、工業化以前の社会において、農民は近現代の労働者と異なり、「誰も時間に細かい注意を払う必要はないし、課題を計画的に行うことにも注意する必要がないのである。」と述べ、計画性の重要性は近代になって初めて生じたと指摘している²⁾。

4.2 農書の定義

有蘭正一郎（1985, p.45）は、農書を「家すなわち農業経営単位のレベルで実践可能な、在来のものより進んだ耕作及び経営の技術を普及させるか記録する目的で著された農業技術書」と定義し

ている¹⁾。また、日本の近世農書について、有菌（1985, p. 45）は「ほとんどは長年の営農経験に基づいて、フィールドになった地域の諸条件とくに自然条件に適応しつつ、その範囲内で安全かつ最大の収穫を得る耕作技術の普及または記録を目的として著された経験科学書である。」と述べている¹⁾。本稿でも農書を以上と同様に定義する。

4.3 『農業全書』とは

『農業全書』とは、1697年（江戸時代前期）に発行された、日本で最初の体系的農書である。この農書の特色として、著者の農業経験に基づいた記述に富んでいる、中国の農書『農政全書』の知識・方法を日本に適用することを試みている、畿内各地をはじめとした農業先進地での農業技術の調査が活かされている、全国的な視野に立っている、という4点を挙げるができる。

著者の宮崎安貞（1623～1697）は安芸（今の広島県）に生まれ福岡藩に仕えた下級武士である。その後勤めを辞し、自ら農業を営み、開墾や植林に努め、農業指導にあたった。また、農業の先進地と言われる地方をしばしば訪れ各地の老農に学び、見聞を広めた。また、『農業全書』の完成には、貝原益軒ら貝原家の人々が大きな役割を果たした。儒学者、教育家、博物学者として知られる益軒は、安貞に執筆にあたって『農政全書』を手本にするよう指導した。こうして完成した『農業全書』は全国に広く普及し農家の必読書とされたのみならず、徳川光圀や徳川吉宗といった支配者側の人々にも広く受け入れられた。今回着目したのは、宮崎安貞による「『農業全書』自序」、「卷之一 農事総論」と益軒の兄、楽軒による「卷之十一 附録」である。これらに着目した理由は、『農業全書』の他の部分と異なり、農民への心構えや、農業に対する作者の考えが明確に記されているからである（日本大百科全書）⁵⁾。

5. 『農業全書』に現れる近代的な労働観

近代的な労働観、時間概念に通じる内容を『農業全書』から抜粋する。一つ目の文章は、

一日の計は鶏鳴（明け方）にある事なれば、未明より起きて早朝陽氣（氣）につれて田畠（畑）に出て働くべし。又明る日の仕事を前夜考え定めをき、暁（暁）方おきて天氣の晴雨をよく見はかりて猶其日の手くばりを定むべし（宮崎, 2012, p.49, 括弧内著者）⁴⁾。

というものである。この文章は「卷之一 農事総論 耕作」にある。この文章からは、筆者が定義した近代労働観の、②計画を立てることの重要性を主張、に合致する内容が「明る日の仕事を前夜考え定めをき」というところから読み取れる。また、「未明より起きて早朝陽氣（氣）につれて田畠（畑）に出て働くべし。」というところからは、③長時間働くことを主張（Ⅰ.1日の中での長時間）に近いものを読み取ることができる。

他にも近代的労働観に近い文章がある。それは、

又、農人はつねに曆をみて土用（陰曆で立春、立夏、立秋、立冬の前の十八日間）八專（陰曆で降雨が多く農家に厄日とされている日）其外節（節）氣（二十四節氣）のかほりを考へ、風雨等の變（変）あらんことを心にかくべし。必ず氣のかほりには、晴天も見る中にかはる物なれば、朝夕つとめの品手くばりを閏の中にてよくおもんばかり、彼の節がはりの妨をものがるゝ覺悟兼ねてすべし（宮崎, 2012, p.64, 括弧内著者）⁴⁾。

という文章である。この文章は、②計画を立てることの重要性を主張、にあてはまる。また、当時の農民になじみのある「土用」、「八専」、「節気」といった言葉を用い、分かりやすく説明している。この文章は「卷之一 農事総論 時節を考ふ 第四」にある。同じ項目にこのような文章がある。

日月の天にめぐりて瞬（またたき）する間も、滞りたゆみなき理（ことわ）りを目當（当）として寸陰（ほんのわずかの時間）も怠るべからず。殊に耕作種藝（草木や作物の植え付け）の事は、直に天道の福を専らいの事なれば、怠懶（をこたりものうく、怠けること）して朝も日にをくれて起き、大切至極なる光陰をわきまえず、今日の日の又なき理りをばうちわすれて、偏に怠りがちに不浄なる氣立てにて農業をいとなめば、其心違へるを以て天道のめぐみにもれ、いつとなく田畠も瘠（瘦）せあれ、年をへ月をかさね災いやまし、飢寒のうれへにせまり、後々は父子夫婦もはなればなれになり、終に人づかはれの身とおちぶれ、貧苦のかなしみやむ時なし。然れば心あらん農民は、必ず後のうれへを思ひてあらかじめふせぐべし。天の時にしたがひ一寸の光陰も大切におしみて、農業に身を投（なげう）ち、心を用ひること慎（慎）んでおこたる事なかれ（宮崎, 2012, p.65, 括弧内著者）⁴⁾。

この文章の「大切至極なる光陰」「寸陰も怠るべからず。」「一寸の光陰も大切におしみて」ということから、①時間が貴重で重要なものであると主張、につながる思想が見られる。また、「朝も日にをくれて起き」「今日の日の又なき理りをばうちわすれて、偏に怠りがちに不浄なる氣立てにて農業をいとなめば、」を非難していることから、③長時間働くことを主張、に近い思想が見られる。

ここで一つ注目すべき文章がある。それは、

農人のわざに緩急前後軽重（けいちょう）と云ふ事あり（中略）一々皆よく此理を考えへ、前後緩急しだいを以て、勤めいとなまば、五こく熟して福を得る事はかるべからず。また、軽重前後を取りちがゆれば、たとひ力を盡（尽）し、勤るといへども、作り物よろしからず。農人こゝにをいて心を用ひ、日夜のはたらき時にをくれず、順を以て其法にたがはずは、民のかまどの煙にぎはしく、上下富み足りて安樂ならん事、永く萬世の幸をも引きぬべし（貝原, 2012, p.373, 括弧内著者）⁴⁾。

という文章である。この文章は「卷之十一 附録」の中にある。「農人こゝにをいて…」では、これまでにあげた文章と同じく長時間働くことを奨励している。しかし、「軽重前後を取りちがゆれば、たとひ力を盡（尽）し、勤るといへども、作り物よろしからず。」という部分では、ただがむしゃらに働くのではなく、力を入れるべきところや、仕事の順序、優先順位を意識して働くよう主張している。このことから、農書作者は近代的な労働観を持ちつつ、成果を上げるため、無駄のない効率的な働き方を目指していたことが分かる。

以上から、『農業全書』には、近代的な労働観に近いものが多くあるが、作者は効率的な働き方も主張しているといえる。

6.『農業全書』に近代的な労働観が現れている背景

近代的な労働観が『農業全書』に現れている背景について述べる。『農業全書』の記述から、3つの目的があると考えられる。

1つ目は、飢饉対策である。『農業全書』には凶作の際に植えるべき作物、凶作の見分け方、しっかり働いて蓄えをつくることの重要性などについて詳しく述べている。また、「卷之十一 附録」の中「凶年の兆あらば、前に記すごとく、深く工夫し餓死を救ふべし。」(貝原, 2012, p.369)とあるように飢饉を避けるために工夫せよと説いている⁴⁾。このことから、背景に飢饉の防止があると考えられる。

もう1つは農民の利益である。「諸賢者民をめぐみ、民を利し、農家うるほひ、」(貝原, 2012, p.371)や「民のかまどの煙にぎわしく」(貝原, 2012, p.373)という言葉からも、農民の利益をよく考えていたといえる⁴⁾。安貞や楽軒は、小農による労働集約的(生産要素に占める労働の割合が高い)な経営を目指していた。そのため、単位面積当たりの労働力を増やす必要があり、勤勉に働く必要性を主張したと考えられる。また、彼らは、商品作物の栽培を奨励していた。これは、『農業全書』の中に商品作物の栽培方法を詳しく解説している部分が多くあることからわかる。『農業全書』が発行された江戸時代前期、商品作物は米とは異なり、幕府や藩の財源というよりむしろ農民の利益につながる作物であった。当時、幕府や藩は年貢増収を最優先に考えており、この時点では商品作物の栽培をあまり奨励していなかった。よって、商品作物の栽培をこの段階で奨励していたということは彼らが農家の発展を重視していたことを示している。

3つ目は、社会全体の発展である。ここで注目すべき文章がある。

只民の惣司(惣の管理者)たる人、(中略)喩(たと)へば年貢なき田畠を多く仕立て、民の家々に末代まであたへたとひとしかるべし(貝原, 2012, p.371, 括弧内著者)⁴⁾。

この文章は「卷之十一 附録」の中にある。この文章は、一見、年貢を取らない田畑をつくることを肯定しているように思える。そのため、筆者は当初、この文章は仮説で考えたように、農書の主張が年貢増徴を目的としていない根拠だと考えた。しかし、研究を進めるうちに、これは年貢増徴のために支配者が奨励した、新田開発に関係のある文章ではないかと気がついた。江戸時代には、「鍬下年季」という制度があった。これは、新田開発奨励のため、その土地に課せられる租税を一定期間(3年程度)免除する制度である。期間が終わった後も、年貢を低く抑える場合もあった。古村から出て新田開発を行った農民、新田出百姓の多くは貧窮農民や隷属農民であった。彼らは、この制度を利用し、一人前の本百姓になることが多かった。新田開発による田畑の増加と新田出百姓の増加は、年貢徴収対象の増加につながる。よって支配者は、「鍬下年季」を含む新田の開発を奨励した(日本大百科全書)⁵⁾。

『農業全書』での文章がこれを踏まえたものならば、作者は、農家の発展だけでなく、年貢増収による支配者も含めた社会全体の発展も目的とした可能性が高い。楽軒や益軒は福岡藩に仕えた経験を持ち、益軒は庶民教育家としても活躍していた。安貞は下級武士でもあり、実際に農業に携わった経験もあった。そのため、彼らは、支配者、被支配者の双方の事情をよく理解できる立場にあった。また、『農業全書』の「卷之十一 附録」の中には、支配者側の心得を説く文章や、「上下富み足りて安楽ならん事」(宮崎, 2012, p.373)というような身分にかかわらず皆が豊かになることができるということを強調する文章が多い⁴⁾。このことから、作者の目的が社会全体の発展であ

ることがわかる。

このような思想の背景として、農本思想がある。農本思想とは、農業こそが国の基礎という思想である。この思想は『農業全書』の随所にみられる。例えば、冒頭の「『農業全書』自序」には「農業の術は人を養ふの本也。農術くはしからざれば五穀すくなくして、人民生養をとぐることなし。」(宮崎, 2012, p.21) という文章がある⁴⁾。このような農本思想は中国からもたらされたものである。それを示す例として、『農業全書』の労働集約的な小農経営を説く場面に『農政全書』や中国の農書、『齊民要術』からの引用があることがあげられる(有蘭, 1985)¹⁾。

7. 後世の農書に与えた影響

『農書の地理学的研究序説』(有蘭, 1985)をもとに、『農業全書』が後世の農書にどのような影響を与えたのかを明らかにすることができた。1697年の『農業全書』の刊行を契機にして、各地で農書が書かれ始め、18世紀の後半以降その数が増加した。18世紀以降の農書の大半は『農業全書』の書式にしたがっている。表1は、『農業全書』の記述からの引用や批評がある農書の一部をまとめたものである。

表1 『農業全書』を引用、批評した農書の例

農書	刊行年	作者	身分	地域
『耕稼春秋』	1707	土屋又三郎	農政家	加賀国石川郡御供田村
『農業全書約言』	1721	陶山鈍翁	農政家	対馬国
『老翁置土産並添日記』	1785	長崎七左衛門	肝煎(名主・庄屋)	羽後国秋田郡七日市村
『農業時の菜』	1785	細井宣麻	旅館の亭主	三河国赤坂宿
『軽邑耕作鈔』	1847	淵沢圓右衛門	地頭	陸中国九戸郡
『農稼録』	1859	長尾重喬	豪農	尾張国大宝新田

有蘭(1985, p.46-48)の記述をもとに筆者が作成した¹⁾。

このことから、『農業全書』は二つの意味において後世の農書に大きな影響を及ぼしたといえる。一つ目は、『農業全書』の刊行によって、日本の農書の書式モデルが形成されたということである。もう一つは、18世紀に入ると、それに依拠する農書が多数著されたということである。後世の農書作者は、彼等の営農経験にもとづいて、『農業全書』地域の実状と合致するところと、そうでないところに整理し、『農業全書』の地方版にあたる農書を著述した(有蘭, 1985)¹⁾。

このように『農業全書』が後世の農書の参考になった理由として、有蘭は、『農業全書』の記述が体系的でまとまっていたことに加えて、巻頭に徳川光圀の命により彼に仕えていた僧で儒学者の佐々宗淳が序文を寄せ、また当時の著名な知識人であった貝原益軒と、貝原益軒の長男好古がそれぞれ序文と跋文を書いて権威付けがなされていることや、さらに京都の書店から印刷物として刊行されたことが大きく影響したためであろうと考えている(有蘭, 1985)¹⁾。

『農業全書』と同じ主張をしていた後世の農書もよくみられる。例えば、スミスは『農業全書』を手本に書かれた『私家農業談』(1789)を引用して「よく引用される諺は、『一年の謀ハ正月にあり、一日の謀ハ朝にあり』と助言するのである。」と述べている²⁾。この文章は、『農業全書』の計画性を重んじるという思想を受け継ぎ、より具体的な形で表現している。

このように『農業全書』は実際の農業に基づいた先進的な農法をわかりやすく体系的にまとめて

いたこと、当時の著名な知識人が著作にかかわっていたということが要因で、後世の多くの農書に論理はそのまま、細かい技術は修正を加えながら受け入れられた。

8. 農書の思想が広まる過程

8.1 農書の思想が農民に伝えられる流れ

『日本社会史における伝統と創造』を読み進めた結果、農書の教えは次のように広まったと分かった。まず、地元の巧者が農書に基づいた改良を実例で示す。それを受けて、他の農民が彼の指導についていく。改良された技術が役に立つことを実際に見ると農民たちは決して背を向けなかった。また、村内の意見は、老農や農書作者の提示した農業の標準を一般にも強制する傾向があった。なぜなら、隣人同士がお互いの農業を批判的な目で見えていたからである。この背景には、経営規模が小家族単位になったということがある。このため、大経営の農家に比べて、農業と副業のやりくりが可能になり、個人の非農業収入を農業経営や家族のために役立てやすくなった。この結果、副業の展開を助長し、農業の時間的制約が強まった。また、農業は高度に競争的になっていたため、時間の使い方に無頓着でいると没落する危険があった。以上の理由から、多くの農民は時間の使い方に関心を持っていた（スミス, 1995）²⁾。

特に『農業全書』が知識人だけでなく多くの農民に受け入れられた背景として、有菌は、商業的農業の具体的な技術を会得したいという願望が上層の先進的な農家にあり、『農業全書』の技術をひとつのモデルとして読んだということがあると述べている（有菌, 1985）¹⁾。

これに加え、筆者は、『農業全書』の論の運び方がかなり工夫されていたことが、『農業全書』が多くの農民に受け入れられた理由であると考えている。『農業全書』では意見（とそれに対する反論）、具体例、まとめ、という構成になっている部分が見られる。具体例では、実際の収穫の差を数字をあげて示しているものがある。この構成になっている部分が『農業全書』「巻之十一 附録」の中にある。ここではまず、

下民（人民）も又農事の工夫委（くわ）しくし、力を用ひ勤めはげまば、五こく豊かに榮（栄）へ、上には財用（資材）の不足なく、民家は富み、家々にみたん事たとへば囊中（財布の中）のものを探るごとくなるべし（貝原, 2012, p.357, 括弧内著者）⁴⁾。

と農法を工夫し、励むことの重要性を主張している。その後、このような文章がある。

農事をよく知らざる人は、（中略）老翁が説を唯よしなき昔語りの譚言（せんご、うわごとの意）なりとよそに聞きける事も有りなん（貝原, 2012, p.357, 括弧内著者）⁴⁾。

この文章は予想されうる反論（今回の場合、自分たち老人の意見をまともに聞かない人がいるだろうということ）を示している。その後、農業で成功し、収入が2、3倍になった人々を紹介している。ここでは、収穫量についてだけでなく、その時に用いた農法についても、具体的な数字を用いている。最後に、これらをまとめて、農法を工夫し、励むことを再度主張している。このように理路整然とまとめられているからこそ、『農業全書』は多くの農民に受け入れられたといえる。

8.2 実際に農書の思想が根付いていたことを示す例、養蚕

上に示したような過程を経て、農書の思想は多くの農民に広まっていった。その例として二つ挙げることができる。一つは当時日本全国に広まった養蚕である。蚕はデリケートな生物で不断に熟練した世話が必要であった。それに加え、養蚕は、特別の用具、時間の大きな再配分、桑畑のための土地の再配分を必要とするため、農家では長期的考慮なしにこれをやり始めることはありえなかった。しかし、農書の作者たちが養蚕の収益性を示し熱心に勧めた結果、養蚕は全国的に広まった。このことは、農民たちが農書の主張を進んで受け入れ、計画性や長時間の作業が要求される作業に進んで取り組んだということを示している（スミス, 1985）²⁾。

8.3 実際に農書の思想が根付いていたことを示す例、時間規律

もう一つの例は、時間規律の発達である。農民の時間概念や、時間節約の工夫に関してスミス (1985, p.214) は、

時間は過ぎ去っていく貴重なものと見なされ、その生産的な使い方に大きな道徳的価値が付与された。農民は仕事を調整し、時間の自然的制約を延長するために、きめ細かい努力をした。例えば、早生や晩生を上手に使うこと、畝間作付け、敷き藁を敷いた苗床、速効性の肥料の使用、などの時間万能方策である。しかしながら、こうした工夫は、どれも個人の利益のためではなかった。時間は、個人の所有ではなく、まず家族に属し、それを通じて、親族、近隣、そして村に属していた。

と述べている²⁾。このように、農民は農書の教えを参考にして、時間を貴重なものと考え、時間を節約するために様々な工夫をしていた。また、時間の自然的制約を延長する努力をしていたことは、自然の流れにそのまま従って農業を行っていた多くの国々とは対照的である。「時間が個人の所有でない」という考え方は、明治時代以降の日本の労働者の、「時間も仕事の仲間の集団所有になっていた」という考え方に似通っている。

8.4 実際に農書の思想が根付いていたことを示す例、休暇

スミスは、江戸時代の農民について、「ほとんど肉体的限界近くまで余暇より収入を選択してきた」(1995, p.230)²⁾と考えていた。その時参考にしていたのが、1867年の『石川家日誌』における記述である。『石川家日誌』とは江戸南西丘陵部の農村にあった石川家の石川家当主の行動を毎日記録した日記である。ちなみに、記録をつけることは多くの農書作者が作業計画の手助けとなるとして奨励していた。この日記では年末には作物の収穫高がまとめられている。このことは、石川家が生産性に関心を持っていたことを示している。また、十二種類の作物を栽培し、養蚕も行ったことが日記から分かった。それらをすべてこなすには熟練した作業工程が必要である。スミスはこの石川家日誌から(1)日々すべき課題が絶えず変化していること、(2)仕事の流れが着実に続いていること、(3)一般的に休日が少ないこと、という3つのことに注目した。スミスは、(1)について、課題の変化は気まぐれによるものではなく、石川家が多く作物と作業課題を抱えているため、計画の修正が必要であったから生じたものだと指摘している。また、(2)については、いくつかの義務的業務は年間を通じて定期的に続いており、季節による休日の変化も少ないと指摘している。(3)については、表2に示したように、休日が極めて少ないことに注目している。月ごとにみても、

最も休みが多いのは1月の5日で、3月以降は7月の3日を除き、2日以上の日がある月はないとも述べている（スミス, 1995）²⁾。

表2 『石川家日誌』における1年間の石川家当主の行動

	公務	屋外の仕事	屋内の仕事	市	屋外と屋内	休日
日数	39	222	35	2	38	18

この表はスミス（1995, p.220）の記述をもとに作成した²⁾。「屋外と屋内」の項目には、市場への部分出張（16日）が含まれる。「屋内の仕事」についてスミスは、何をしていたか具体的には分からないものの、農具の修理や種の管理といった農閑期の仕事や養蚕や記録の仕事ではないかと推測している。尚、通常の陰暦1年の日数は354日である（スミス, 1995）²⁾。

しかし、江戸時代には休日が増えていたという考え方もある。斎藤修の調査によると、19世紀初頭までの遊び日は年間20～30日であったが、早いところでは18世紀後半、ほとんどの地域では19世紀中に休日の日数は増加に転じ、多くて年に50～60日、仙台藩では80日までに増加した（武田, 2008）³⁾。武田（2008）は、江戸時代の農民に時間管理の重要性の認識や自然に左右されない計画性があったこと、夜なべや副業を盛んに行うことによって一日の中での労働時間が増加したことやそれによって農民の生産性が向上したことに同意している³⁾。しかし、斎藤の調査を受け、武田（2008, p.79）は、「農業における生産性の上昇が労働の際限のない投入による所得増加の追求ではなく、『余暇』の増加という成果にも結びついていた」と述べている³⁾。

以上のことから、農書の教えは、多くの農民に広まり、農民が時間を貴重なものとみなし、計画性をもって働くことにつながったといえる。しかし、それによる生産性の向上について、それを余暇に回した、さらに働くことで収入を増やすようにした、という2つの意見に分かれている。1年の労働時間を集計した資料の数が多くないため、どちらが正しいかは断定できない。よって農書の教えが1年の労働時間の増加につながったのかどうかについては疑問が残る。

9. 考察

以上から、次のような考察ができる。

仮説①については、『農業全書』には近代的労働観に近いものがあると明らかになった。ただし、ただ一生懸命に働くのではなく、効率よく働く必要性も主張していた。仮説②については、『農業全書』に近代的労働観が現れている背景には、飢饉から農民を救い、農民を豊かにさせたいという作者の意図があったとわかった。それだけでなく、年貢増収による支配者側の利益を含めた社会全体の発展という作者の意図があった。③について、『農業全書』は、その体系化された文章や、著名な人々からの支持などが理由で後世の農書に受け継がれていったということが分かった。④については、農民が時間を貴重なものと考え、計画性を持って働いていたということが分かった。しかし、1年を通しての労働時間が多かったかどうかは不明である。

10. 結論

以上の考察から、次のような結論を得ることができた。

『農業全書』では、近代的な労働観を説いている。この目的は、農家を飢饉から救い、発展させるためだけでなく、農業の進歩による社会全体の発展もあった。『農業全書』の思想は、後世の農書にも受け継がれた。そして、農書の思想は、地域の巧者を通して、日本の多くの農民に広まって

いった。その結果、農民は時間を貴重なものと考え、計画的に働くようになった。しかし、これが一年間の労働時間の増加に結び付いたとは断定できない。

11. 論文の意義

今日、日本の長時間労働が社会問題となっている。その背景に現代の労働者を取り巻く様々な環境があると考えられている。しかし筆者は、日本人が昔から時間を貴重なものと考え、長時間働く人々であったという歴史的要因もこの問題の背景にあるのではないかと考え、この論文に取り組んだ。

その結果、江戸時代の農民に関しては近代的な労働観を持っていたということを明らかにすることができた。明治時代の労働者の多くが江戸時代の地方農民であったという事実を踏まえると、江戸時代に近代的労働観がすでに根付いていたことが、明治時代の日本の労働者が近代的な労働観にすぐに適応できた大きな要因であるといえるだろう。ただし、明治時代以降、相次ぐ戦争や太平洋戦争の敗北、高度経済成長とその終焉など、日本社会や日本人の労働観に大きな影響を与えた出来事が少なからずあった。そのため、江戸時代の労働観が現代の日本の労働観と直接つながっていると断定することはできない。

しかし、日本人の働くことに対する考え方の源流を知ることは現在の問題を従来とは異なる視点から考えるときに役立つだろう。江戸時代の労働観を明らかにすることはその手助けとなる。これができることが、今回の論文の最大の意義であると考えられる。

12. 今後の課題

今回の探究では、日本の江戸時代に焦点をあてて探究したため、他国の事象を扱うことができなかった。その中では、特に中国の事例について扱いたいと考えている。なぜなら、『農業全書』をはじめとする日本の農書はその思想の点において『農政全書』に代表される中国の農書の影響を強く受けているからだ。また今回は、対象が江戸時代ということもあり、具体的な数値やグラフに乏しい探究となってしまった。そのため、根拠の客観性が乏しかった。最も大きな課題は、江戸時代の農民は一年のうちどれくらいの日数働いていたのかについて明確な結果を示すことができなかったことである。その結果、農書の思想が農民の働き方にどこまで影響していたか十分明らかにすることができなかった。以上を今後の課題として示す。

参考文献

- 1) 有蘭正一郎 (1985) 「農書の地理学的研究序説」『人文地理』. 37 (4), p.44-65, 人文地理学会 <https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjhg1948/37/4/37_4_332/_pdf>. (最終閲覧日2019年8月15日)。
- 2) スミス.C.トマス(1995)『日本社会史における伝統と創造 ―工業化の内在的諸要因1750-1920年―』。大島真理夫訳, ミネルヴァ書房。
- 3) 武田晴人 (2008) 『仕事と日本人』. ちくま新書.筑摩書房。
- 4) 宮崎安貞 編録, 貝原楽軒 刪補 (2012) 『農業全書』. 土屋喬雄 校訂, 岩波文庫。
- 5) 編者不明 (1994) 『日本大百科全書』. 小学館。